「国史跡　福岡城跡」
本丸武具櫓跡　発掘調査報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1327 集

２０１７

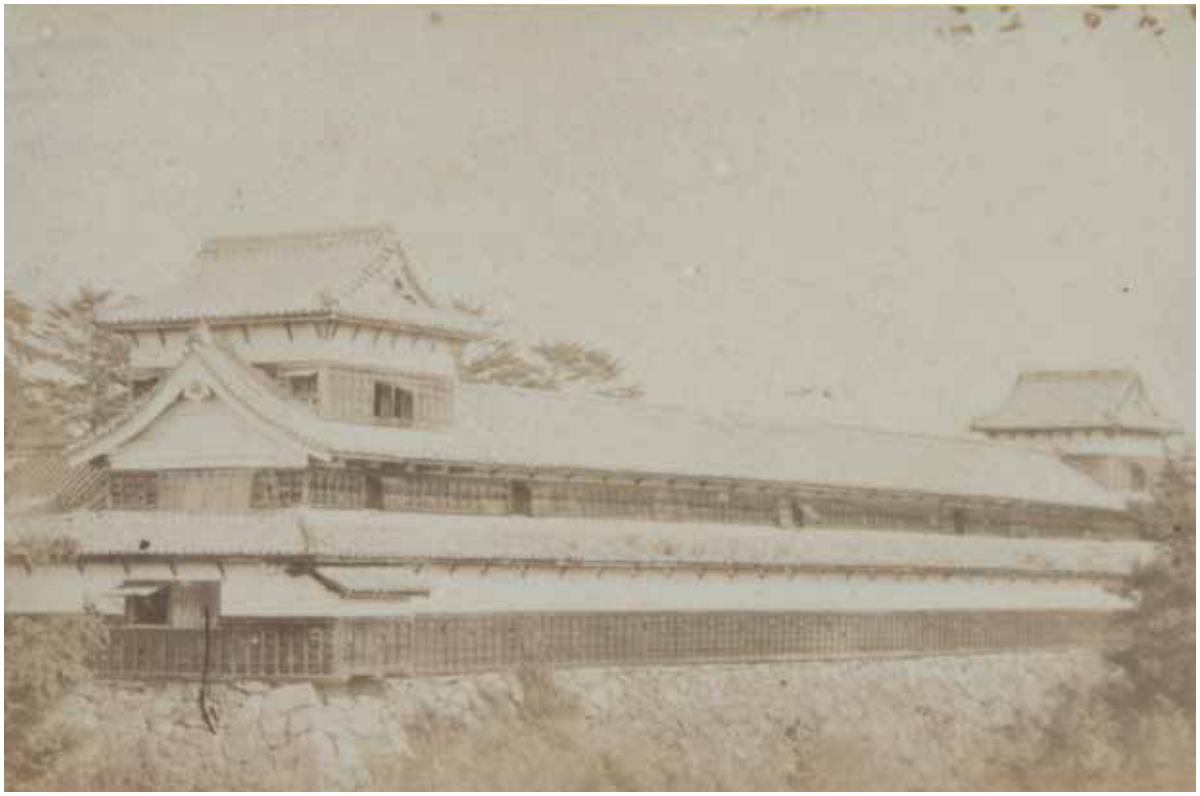
福岡市教育委員会

「国史跡　福岡城跡」
本丸武具櫓跡　発掘調査報告

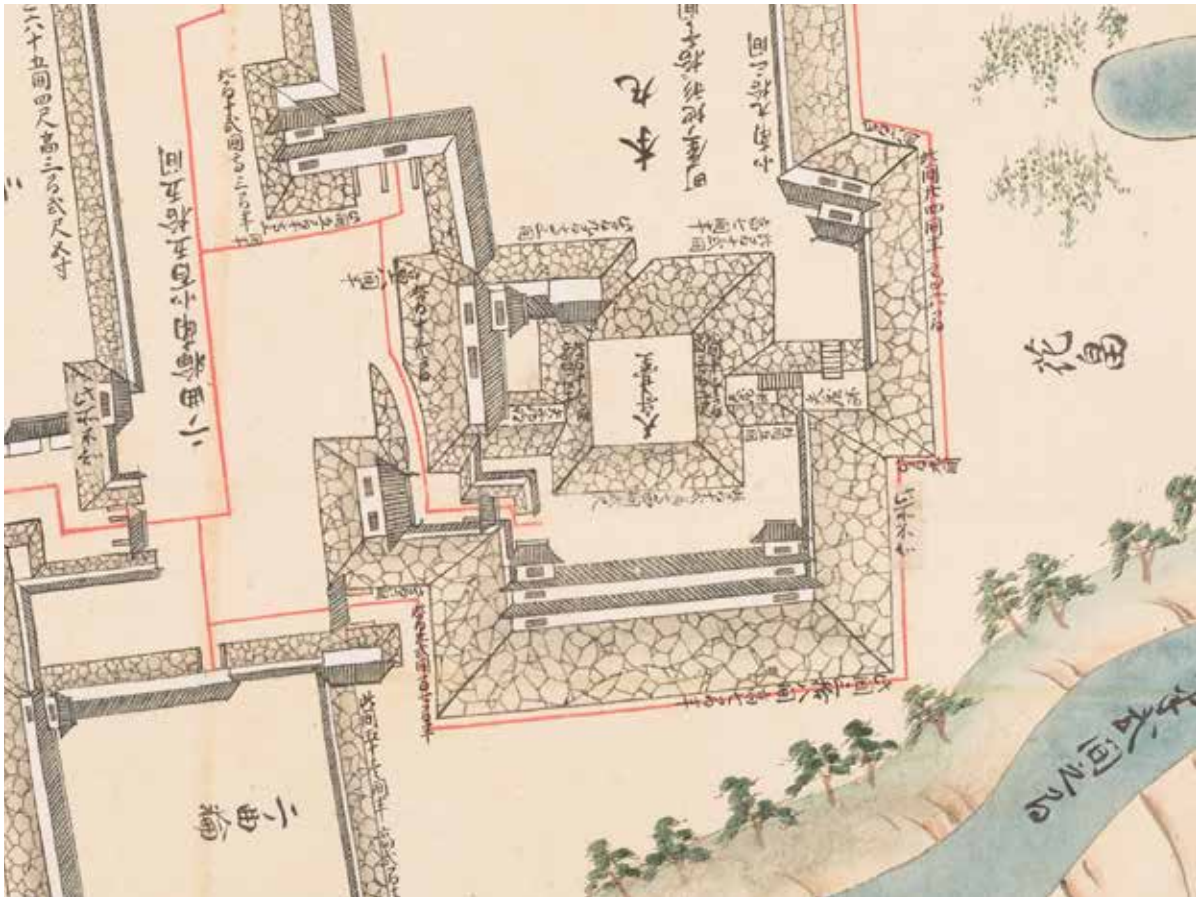
福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1327 集

２０１７

福岡市教育委員会

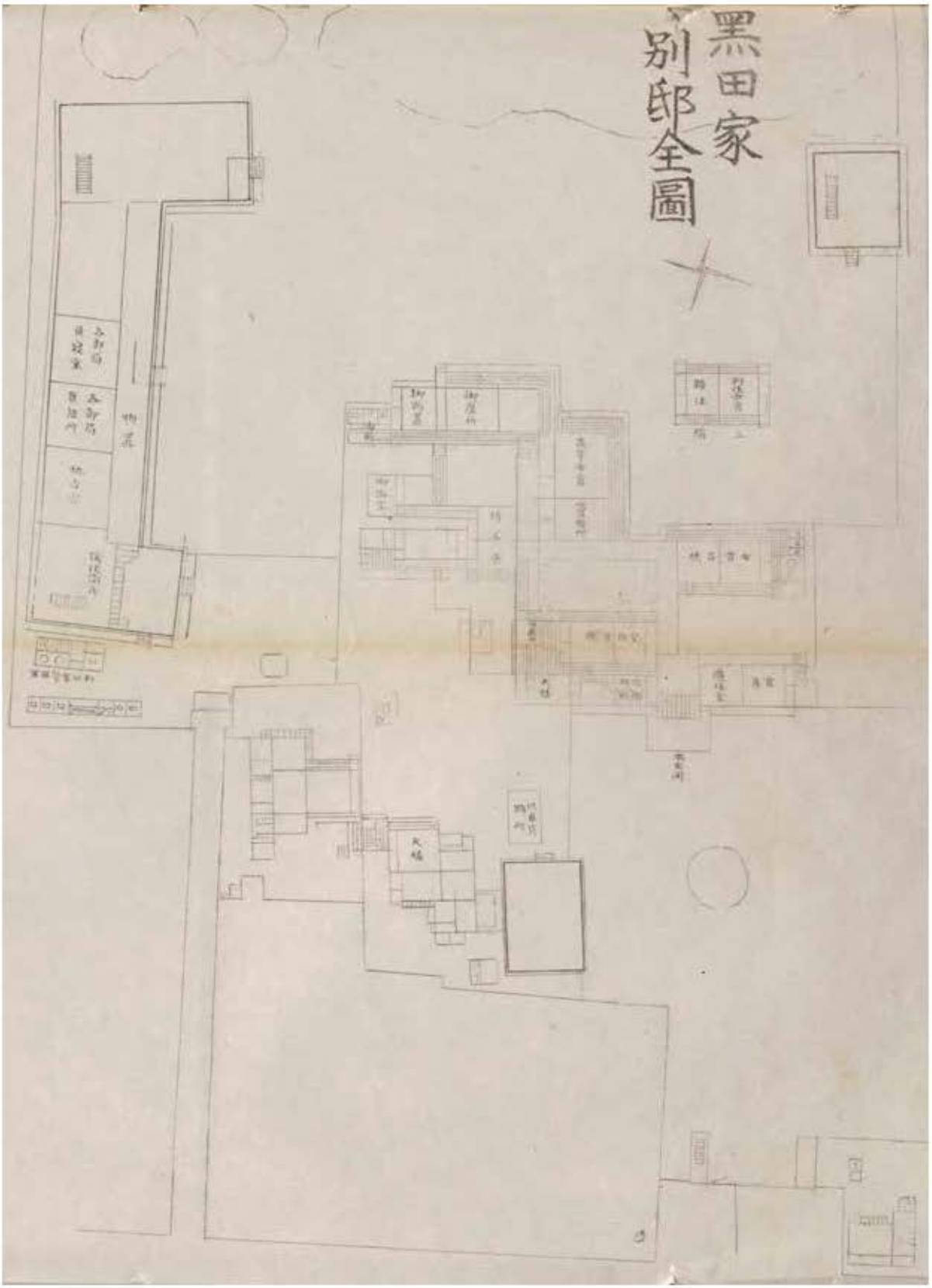


福岡城本丸武具櫓古写真（明治期・南東から）福岡市博物館所蔵



正保福博惣図（天守台付近・北が上）福岡市博物館所蔵

巻頭図版 2



黒田家別邸全図（北が上）宮内庁書陵部所蔵

序

福岡城跡は、福岡藩初代藩主黒田長政が、慶長 6（1601）年から 7 カ年をかけて築城した近世城郭です。福岡城はその後、江戸時代を通して福岡藩の中心として機能し、福岡市の都市形成や文化に深い影響を与えました。昭和 32（1957）年には国史跡に指定され、本市を代表する歴史的文化遺産として高く評価されています。

本市では、昭和 62（1987）年、福岡城跡三の丸において、古代日本の外交施設であった鴻臚館の遺構が発見されたことを契機に『舞鶴城址将来構想（中間とりまとめ）』を策定しました。その後、平成 18（2006）年に福岡城跡全体の保存・整備・活用の方向性を定めた『福岡城跡保存整備基本構想』を、平成 24（2012）年に福岡城跡を史跡として適切に保存・管理するための共通の方針を定めた『国史跡福岡城跡 保存管理計画』を策定しました。

さらに、同 年 12 月策定の『第 9 次福岡市基本計画』で示された「鴻臚館跡」「福岡城跡」の二つの国史跡を活用した整備を進めるという方針を踏まえ、平成 26 年（2014）6 月に福岡城跡整備を着実に具体化していくための計画として『国史跡福岡城跡整備基本計画』を策定しました。

現在、福岡城跡では『国史跡福岡城跡整備基本計画』に基づき、城内に存在した建物の復元整備計画が進められており、本書はその対象である本丸武具櫓跡の発掘調査報告書です。

調査から本報告書作成までの間、福岡城跡建造物等復原整備検討委員会をはじめ、文化庁、福岡県、財務省福岡財務支局等の関係各機関には多くのご協力とご理解をいただきました。記して深甚なる謝意を表しますとともに、この報告書が広く活用され、福岡城跡の保存と活用に対する理解を深める一助になることを願います。

平成 29 年 3 月 24 日
福岡市教育員会
教育長　星子　明夫

例　言

1. 本書は、福岡市教育委員会が行った国指定史跡　福岡城跡の発掘調査報告書である。
2. 福岡城跡の発掘調査、及び本書の作成は、国庫補助事業として実施した。
3. 本書に使用した遺構実測図の作成は、瀧本正志・星野惠美・菅波正人・阿部泰之・赤坂亨・大森真衣子・山口譲治・田中昭子・時吉ひとみ・深溝嘉江が行った。
4. 本書に使用した遺物実測図の作成は、池崎譲二・吉岡涼子・冨永静子・吉野満美子・安田美哉・吉田弘美が行った。
5. 本書に使用した写真は瀧本・赤坂が撮影した。
6. 本書での方位は平面直角座標系第２系（世界測地系）による。
7. 本書の第１章第３節は髙山英朗（福岡市博物館学芸員）が執筆した。その他の部分の執筆・編集は、瀧本と協議の上、赤坂が行った。
8. 本報告書に関する記録と遺物類は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、ここで管理する。

遺跡調査番号	1334・1439	遺跡略号	FUE（FUE-72・73）
所在地	中央区城内 5-2	分布地図番号	60-0192
調査対象面積	675.5㎡（武具櫓推定面積）		
調査面積	346.2㎡（1334），262㎡（1439）重複あり		
調査期間	2013.11.19 ～ 2014.3.28（1334），2014.12.18 ～ 2015.3.18（1439）		

目　次

第１章　はじめに　1
　第１節　調査の目的　1
　第２節　調査・整理の組織　2
　第３節　武具櫓の歴史と機能　2
　　第１項　福岡城の築城と武具櫓　2
　　第２項　武具櫓の構造と規模　3
　　第３項　武具櫓の変遷　4
　　第４項　武具櫓の機能　5
　　第５項　明治維新後の武具櫓　7
第２章　武具櫓跡の調査　8
　第１節　遺構について　8
　　第１項　周辺環境と調査の概要　8
　　第２項　西附平櫓・西三階櫓部　11
　　第３項　二階多聞櫓部　13
　　第４項　東三階櫓・東附平櫓　20
　　第５項　土塀および東附平櫓北側　22
　第２節　出土遺物　25
　　第１項　出土遺物概要　25
　　第２項　西三階櫓・西附平櫓部出土遺物　25
　　第３項　二階多聞櫓部　25
　　第４項　東三階櫓・東附平櫓部　43
　　第５項　遺構外出土遺物　44
　　第６項　出土遺物考察　44
第３章　成果と課題　45
　第１節　発掘調査成果　45
　第２節　文献資料との照合　46
　第３節　課題　48

挿 図 目 次

Fig.1　国史跡福岡城跡指定範囲および
本丸武具櫓跡位置図（1/8000）
Fig.2　木箱（周防憲男資料１）
福岡市博物館所蔵
Fig.3　福岡衛戍略図
Fig.4　絵葉書「福岡城武具櫓」
（大正５年以後）
Fig.5　武具櫓曲輪周辺現況図および
調査区位置図（1/600）
Fig.6　南面石垣・西出隅角　（南から）
Fig.7　南面石垣・東出隅角　（南東から）
Fig.8　東面石垣
・小天守台東面石垣（北東から）
Fig.9　武具櫓曲輪
（大天守台から西出隅角を望む）
Fig.10　武具櫓跡各部名称および
１次・２次調査区（1/500）
Fig.11　西三階櫓・西附平櫓部平面図（1/100）
Fig.12　西附平櫓部 雨落溝 SD-02・03
断面・見通図（1/50）
Fig.13　Tr.① 表土除去後
礎石検出状況（北から）
Fig.14　Tr.① 鉛塊出土状況（北から）
Fig.15　Tr.①北側西附平櫓部（北から）
Fig.16　Tr.① 北側西附平櫓部（東から）
Fig.17　Tr.① 南側西三階櫓部
（北東から）
Fig.18　西面石垣天端・SD-03 排水部
（北から）
Fig.19　Tr.① SD-02（北から）
Fig.20　Tr.① SD-02 瓦出土状況（東から）
Fig.21　Tr.① SD-01・02 合流部（南から）
Fig.22　Tr.① 礎石 53・57 および
礎石据付穴２（東から）
Fig.23　西出隅角天端・裏込石・礎石 01
表土除去後　（東から）
Fig.24　南面石垣天端・裏込石・
礎石 02-04 表土除去後（西から）
Fig.25　二階多聞櫓部全体平面図（1/350）
Fig.26　礎石 27（調査前・東から）および
礎石 27 刻印「○に一」「ニ」拓影
（縮尺不同）
Fig.27　二階多聞櫓部西部平面図（1/100）
Fig.28　礎石 29・28・27・26・25
（調査前・東から）
Fig.29　Tr.① 武具櫓跡西半部・沓脱石 100
（東から）
Fig.30　Tr.① SD-01・07（北から）
Fig.31　Tr.① SD-07・裏込石・礎石№ 27
（西から）
Fig.32　二階多聞櫓部中央部平面図（ 1/100）
Fig.33　Tr.① 沓脱石 100・SD-01（北から）
Fig.34　Tr.⑬ 沓脱石 101・SD-01（北から）
Fig.35　二階多聞櫓部　沓脱石 100・101・102
および雨落溝 SD-01・09　断面
・見通図（1/50）
Fig.36　南面石垣天端・礎石 10（東から）
Fig.37　Tr.⑭沓脱石 102・SD-01 および
Tr.⑧⑨⑩（東から）
Fig.38　10・11 区 SD-09（北から）
Fig.39　Tr.⑭沓脱石 102・SD-01
（北から）
Fig.40　二階多聞櫓部東部平面図（1/100）
Fig.41　Tr.⑮⑯⑰ 東三階櫓・
東附平櫓部（北から）
Fig.42　Tr.⑮⑯ 東附平櫓部（西から）
Fig.43　Tr.⑮⑯ SD-04・05（北から）
Fig.44　Tr.⑮ SD-01・04 検出状況
（北から）
Fig.45　３・５区東三階櫓～二階多聞櫓
接合部（西から）
Fig.46　３・８区　SD-08・09（東から）
Fig.47　3・4 区東附平櫓部（北から）
Fig.48　3c 区　SD-08・09 合流部（南から）
Fig.49　西三階櫓・西附平櫓部平面図
（1/100）
Fig.50　Tr.⑰ SD-05 排水口・地覆石
（北から）
Fig.51　Tr.⑯礎石 72・谷丸瓦・

地覆瓦出土状況（北から）
Fig.52　東三階櫓部　雨落溝
断面・見通図（1/50）
Fig.53　東三階櫓・東附平櫓部
土層断面図（1/50）
Fig.54　土塀基礎石列（北から）
Fig.55　東附平櫓北側・土塀基礎石列・
土塀西側平面図（1/100）
Fig.56　1 区東附平櫓北側部（北から）
Fig.57　9・14 区土塀西側部（北から）
Fig.58　埋甕 SX-01　平面図、断面・見通図
（1/20）および写真（上：甕内遺物
出土状況、下：完掘時）
Fig.59　西三階櫓・西附平櫓　出土遺物 1（1/4）
Fig.60　西三階櫓・西附平櫓　出土遺物 2（1/4）
Fig.61　西三階櫓・西附平櫓　出土遺物 3（1/4）
Fig.62　西三階櫓・西附平櫓　出土遺物 4（1/4）
Fig.63　西三階櫓・西附平櫓　出土遺物 5（1/3）
Fig.64　西三階櫓・西附平櫓　出土遺物 6
（[69]=1/2，[75,78-80]=1/3，
[65-68,70-74,76-77]=1/1）
Fig.65　西三階櫓部出土鉛塊 [81]（縮尺不同）
Fig.66　二階多聞櫓　出土遺物 1（1/4）
Fig.67　二階多聞櫓　出土遺物 2（1/4）
Fig.68　二階多聞櫓　出土遺物 3（1/4）
Fig.69　二階多聞櫓　出土遺物 4（1/4）
Fig.70　二階多聞櫓　出土遺物 5
（[28-130]=1/4，[132]=1/6，
[133-140]=1/3）
Fig.71　二階多聞櫓　出土遺物 6（1/3）
Fig.72　二階多聞櫓・東附平櫓・東三階櫓
出土瓦写真（縮尺不同）
Fig.73　二階多聞櫓　出土遺物 7
（[163-178]=1/1，[179-183]=1/3）
東三階櫓・東附平櫓　出土遺物 1
（[184-186]=1/3，[187-192]=1/1）
Fig.74　二階多聞櫓　出土遺物 8（[197]=1/3）
東三階櫓・東附平櫓　出土遺物 2
（[193-195]=1/4，[198-199]=1/3）
Fig.75　東三階櫓・東附平櫓　出土遺物 3
（[201-220]=1/3，[200]=1/6）
Fig.76　遺構外出土遺物 1（1/4）
Fig.77　遺構外出土遺物 2（1/4）
Fig.78　遺構外出土遺物 3
（[256-262]=1/4，[263-265,268-269]
=1/3，　[266-267]=1/1）
Fig.79　武具櫓推定柱通り・武具櫓各所の比高差
（単位 cm・1/450）
Fig.80　武具櫓推定柱通り計測値
（単位㎝・1/250）
Fig.81　黒田別邸図武具櫓（拡大・一部トレース）
および内部間数検証図
Fig.82　移築前武具櫓（幕末期 ~ 大正 5 年・上）
および旧武具櫓（時期不明・下）
一階平面想定復元図（1/450）
Fig.83　福岡城旧地形推定図（『国史跡福岡城跡
保存管理計画』図Ⅱ -11）

図 版 目 次

巻頭図版 1　上：福岡城本丸武具櫓古写真（明治期・南東から）福岡市博物館所蔵
下：正保福博惣図（天守台付近・北が上）福岡市博物館所蔵
巻頭図版 2　黒田家別邸全図（北が上）宮内庁書陵部所蔵

表 目 次

Tab.1　歴史的建造物の復元可能性（『福岡城跡整備基本計画』表 4-3）

第１章　はじめに

第１節　調査の目的

福岡市では平成 25 年度に『福岡城跡整備基本計画』を策定し、短期を 5 年、中期を 10 年として国史跡福岡城跡の整備を行っていく予定である。歴史的建造物については古写真・絵図・文献資料等に加え、発掘調査により真正性を確保できるものを復元する。Tab.1 に示す評価結果の内、「A」「B+」「B」評価建造物について、更なる調査検討を行った上で、復元整備対象とする。今回、発掘調査の対象とした武具櫓は計画で短期整備に位置付ける予定であることから発掘調査を実施し、復元資料とするものである。発掘調査は平成 25・26 年度、整理作業は平成 28 年度に実施した。調査期間は平成 25 年 11 月 19 日～平成 26 年 3 月 28 日（平成 25 年度）、平成 26 年 12 月 18 日～平成 27 年 3 月 18 日（平成 26 年度）である。

	A　復元の可能性が高い	B　復元の可能性がある	C　復元が困難	D　復元が極めて困難
本丸	本丸表御門　太鼓櫓	+武具櫓　+本丸裏御門　本丸御殿	時櫓　月見櫓	天守
二ノ丸		東御門　炭櫓　革櫓　松木坂御門　大組櫓　向櫓　鉄物櫓		
三ノ丸	上之橋御門　潮見櫓　花見櫓	御下屋敷		北東隅櫓　南東隅櫓

Tab.1　歴史的建造物の復元可能性（『福岡城跡整備基本計画』表 4-3）

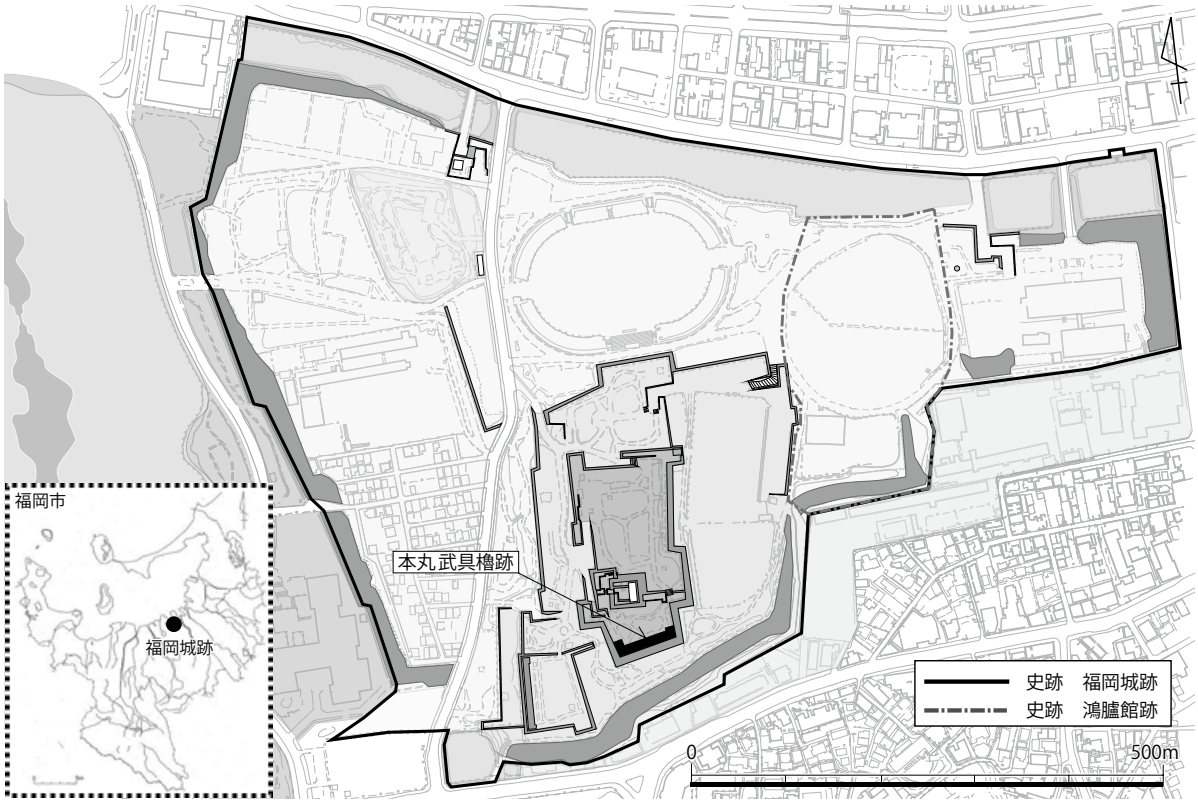


Fig.1　国史跡福岡城跡指定範囲および本丸武具櫓跡位置図（1/8000）

第２節　調査・整理の組織

各年度の組織体制については、以下の通りである。

平成 25 年度（調査）

調査主体	福岡市教育委員会	
調査総括	文化財部長	西島裕二
	大規模史跡整備推進課長	田中壽夫
調査担当	埋蔵文化財調査課調査第一係	瀧本正志
調査庶務	大規模史跡整備推進課福岡城跡整備係	柴田博和

平成 26 年度（調査）

主体	福岡市教育委員会	
総括	文化財部長	西島裕二
	大規模史跡整備推進課長	宮井善朗
担当	大規模史跡整備推進課福岡城跡整備係	赤坂　亨
庶務	大規模史跡整備推進課福岡城跡整備係	坂本裕輔

平成 28 年度（整理）

主体	福岡市教育委員会	
総括	文化財部長	菊田浩二
	大規模史跡整備推進課長	宮井善朗
担当	大規模史跡整備推進課福岡城跡整備係	赤坂　亨
庶務	大規模史跡整備推進課福岡城跡整備係	坂本裕輔

第３節　武具櫓の歴史と機能

本節では、江戸時代、福岡城本丸に存在した武具櫓について、「福岡城の築城と武具櫓」「武具櫓の構造と規模」「武具櫓の変遷」「武具櫓の機能」「明治維新後の武具櫓」の５項目に分けて述べていくこととする。なお、福岡城については数多くの先行研究があり、近年では『新修　福岡市史　特別編福岡城－築城から現代まで－』（福岡市、2013 年）が刊行され、築城から現代に至る福岡城の歴史が通観できるようになった。本節も、これら先行研究に依りながら記述を進めていく[1]。

第１項　福岡城の築城と武具櫓

福岡城の築城は、福岡藩の儒学者・貝原益軒が著した「筑前国続風土記」の記述から、慶長６年（1601）に始まったとされている。「筑前国続風土記」には普請工事の詳細な開始時期について触れられてはいないが、当時の一次史料からある程度うかがうことができる。

慶長６年５月、上方にあった初代藩主黒田長政は、同月 27 日付けで石垣普請を担当していた家臣野口一成と益田正親の両名および菅正利に宛てた書状の中で、「普請てつ代之者共五郎太わらせ可置

1　『新修　福岡市史　特別編福岡城』（以下、『福岡城』と略す）では、武具櫓について「Ⅲ本丸」（71 ～ 101 頁）で近世から近代まで言及されている。また、「Ⅱ福岡城の歴史」（11 ～ 68 頁）においても武具櫓について言及している部分がある。本稿はこれらに多くの部分を依拠している。併せて参考されたい。

候事」「大石之衆ニハ寄石可申付候、我等くたり候て、ね石ヲおき可申候」と普請手伝の者に割らせて五郎太石の準備を進めること、大石之衆に命じて石の集積を進めること、自身が帰国した後に根石を据えることを命じている[2]。

一方、長政の父・黒田如水（孝高）は在国しており、長政に代わって築城に関する指示を家臣たちに出していた状況がうかがえる。如水は、同年 7 月 24 日付けで野口一成・益田正親の両名に宛てた書状で「石垣之儀、来月十二日よりつかせ可申候間、可成其意候」と、8 月 12 日から石垣普請を開始する旨を伝えている[3]。また、如水は同日付けで栗山利安・井上之房・黒田直之・後藤基次・母里友信・黒田一成に宛てた書状で「一、天守の石垣今日より可被申付候哉、由断ハ有間敷候へとも精を入可被候」と指示を出しており、ここから福岡城で最初に普請工事が始められたのは天守の石垣普請であったことがうかがえる[4]。

同年 9 月朔日付けの書状で長政は、上方から天守周辺の石垣普請について指示を出している。この書状で長政は野口一成・益田正親の両名に対し「城山ねかさよりのおくびの所拾壱間ニ石垣つき申候へと申付置候所、たとへ如水御このミ相違候とも、前之ことくに可申付候」と命じている。ここで記される「おくび」とは、着物の左右前身頃の前襟から裾まで縫い付けられる細長い布のことを意味する言葉で、一般的には「おくみ」とも言う。ここから長政は、城山の根元から前面に広がる箇所と考えられる場所に 11 間の石垣を築くように命じているものと推測される。かつ、その石垣は父如水の好みと違っていても当初の計画通りに築くようにと指示していることも分かる。加えて長政は本書状の中で「三十間ニ居矢倉立候、天守之衛にて候」と、天守を守衛する役割を果たす長さ 30 間の「居矢倉」を建てるとも記している。30 間は約 60 m程度（福岡城では 6 尺 5 寸を 1 間とした）の長さとなるが、ここに記される「居矢倉」とは天守の南方、本丸南側の石垣上に建てられた武具櫓のことを指していると考えられる。ここから、慶長 6 年 9 月前後には天守周辺と本丸の石垣普請工事が完了を迎え、武具櫓をはじめとする櫓や塀などの作事が開始されたものと推測される[5]。

第 2 項　武具櫓の構造と規模

武具櫓の構造について詳細に記した古文書や記録、絵図等は管見の限りでは存在しないため、櫓内部の具体的な構造等については不明な点が多いが、関連史料から建物の概要については知ることができる。

江戸時代初期の福岡城の状況を知りうる史料として、幕府の隠密が認めた寛永 4 年（1627）「幕府隠密復命書」がある。この史料には武具櫓のあった本丸の南側に関する記述があり、「南ノ方石垣高さ十間計、両角ニ三重の矢倉、中ハ多門也」と、武具櫓は高さ 10 間（約 20 m）の石垣の上に建てられ、東西両角に三階櫓とその間をつなぐ多聞櫓から構成されていたことが分かる[6]。

正保 4 年（1648）に福岡藩が幕府に提出した「正保福博惣図[7]」にも本丸南側の石垣上に武具櫓が描かれている。この絵図によれば東西両隅に三階櫓が建ち、その間を二層の多聞櫓がつなぐという構造であったことが分かる。また、福岡藩の筆頭家老三奈木黒田家に伝来し、文化期頃の作成と推測さ

2 『黒田家文書』第 2 巻（福岡市博物館、2002 年）220 頁、『福岡城』16 頁
3 『黒田家文書』第 2 巻 218 頁、『福岡城』16 頁
4 『福岡県史』近世史料編福岡藩初期（下）（福岡県、1,983 年）171 ～ 172 頁、『福岡城』17 頁
5 『黒田家文書』第 2 巻 219 頁、『福岡城』17 頁
6 長崎歴史文化博物館所蔵、『福岡城』87 頁
7 福岡市博物館所蔵　巻頭図版 1 下

れる「覚[8]」に収録されている「御櫓奉行預御道具入覚」や、福岡藩士・伊丹家に伝来した「御要害御門法三ヶ所御門定ほか[9]」などの記載からも、武具櫓は東西に方向に伸びる二層の多聞櫓の両端にそれぞれ三階建ての櫓が附属していたことが分かる。さらに「御要害御門法三ヶ所御門定ほか」の記述によれば東西両隅の三階櫓には平櫓が附属しており、武具櫓全体で戸前が５ヶ所あったという。戸前とは、蔵の出入口で戸がある場所や戸そのものを意味する言葉であることから、武具櫓には戸の付いた出入口が５箇所あったことが分かる。今回の発掘調査で多聞櫓の１階部分からの出入口と推測される遺構が３箇所発見されており、これに加えて東西三階櫓に１箇所ずつの出入口が存在したとすれば、この記述と合致することになる[10]。

武具櫓は、本丸南側の石垣上に建てられたが、この石垣の規模は「正保福博惣図」の記述によれば、東西方向に 38 間（約 75 m）の幅で高さは７間半（約 15 m）であったことが分かる。武具櫓の規模については、前述した慶長６年９月朔日に黒田長政が野口・益田両名に宛てた書状に「三十間ニ居矢倉立候」とあることから長さ 30 間（約 50 m）であったと推測される[11]。この他に武具櫓の規模について記載している江戸時代の史料は管見の限り無いが、福岡浜ノ町（福岡市中央区）にあった黒田家の別邸に武具櫓が移築された大正５年（1916）の「福岡日日新聞」に次のような記述がある。

> （前略）南の三重櫓は方四間で、二階下は長四間、幅六間の平櫓になつて居る。北の三重櫓は方四間あつて、其れに方三間の平櫓が別に附いて居る。此処南北両櫓の間に棟続きで亦た長十五間、幅三間の二重櫓がある。（中略）聞くところに由れば、此の二重櫓は元の長さ二十三間あつたが、余り長過ぎるので今回八間だけ切り縮めてある（後略）[12]。

移築に際し武具櫓は、別邸の敷地西側で南北方向に建てられたので、ここで言う「南の三重櫓」は東三階櫓、「北の三重櫓」は西三階櫓を指している。ここから東三階櫓は２階部分は４間（約５m）四方で１階部分は長さ４間×幅６間（約 12 m）、西三階櫓は４間四方で３間（約６m）四方の平櫓が附属し、間をつなぐ二層の多聞櫓の移築前の規模は長さ 23 間（約 45 m）×幅３間であったことが分かる。移築に際し多聞櫓が８間（約 18 m）切り詰められており、それ以外の部分でも改築された可能性はあるが、上記記載によれば、東西三階櫓を含めた武具櫓全体の長さは 31 間となり、前述した黒田長政書状の記載とおよそ合致することが分かる。

第３項　武具櫓の変遷

江戸時代、諸大名の居城は幕府の統制を受けていた。具体的には、武家諸法度（寛永令）第３条に新規築城の禁止、堀・土塁・石垣が破損した場合は奉行所（老中）に届け出て指示を受けること、櫓や門が破損した場合は元の通りに修復することが定められていた[13]。このことから、江戸時代の城郭では現状復旧以外の普請や作事は行われていなかったと考えられてきたが、近年の研究では幕府の許可のもと現状変更を伴う普請や作事が各地で行われていたことが明らかになっている[14]。

福岡城の武具櫓の修復履歴について、江戸時代を通観できる史料は管見の限り残されていないが、

8　三奈木黒田家文書 1495（九州大学附属図書館付設記録資料館九州文化史資料部門所蔵）
9　伊丹家資料 449（福岡市総合図書館蔵）
10　『福岡城』88 頁
11　『福岡城』88 頁
12　大正５年６月５日付け「福岡日日新聞」掲載の記事「黒田家別邸と武具櫓」。全文が石瀧豊美「福岡城のなぞ－天守閣はあったのか？－」（『福岡地方史研究』第 37 号、1999 年）80 ～ 1 頁に掲載、言及されている。
13　慶長 20 年（元和元年・1615）６月発布の元和令では第６条に新規築城禁止、修復届出の規定がある。
14　白峰旬「武家諸法度下における大名居城の修築と修補申請基準・増改築許可基準について」（『城館史料学』３号〈城館史料学会、2005 年〉のちに同『幕府権力と城郭統制』〈岩田書院、2006 年〉に所収）

享保 17 年（1732）から文政 4 年（1821）までの福岡城の修復普請･作事をまとめた「御要害作事ヶ所附[15]」から、江戸時代後期の武具櫓の修復の様子がうかがい知れる。この史料では武具櫓の修復について下記の 6 件の事例が確認できる。

①寛政 12 年 3～ 5 月：多聞櫓の垂木裏板総取替、瓦葺替、漆喰の修繕、梁の取替、腰板の修繕

②文化 4 年 4 ～ 8 月：東三階櫓と附櫓を新規に建替

③同年 8 月：西三階櫓西側の隅木と出桁の取替、屋根の野地板修繕、瓦葺替、漆喰の修繕など

④文化 8 年：屋根の野地板と瓦の修繕、西三階櫓の二階部分の修繕

⑤文政 3 年 5 月：西三階櫓の 1 階部分に助梁と助柱を入れ、壁の修繕と瓦の修繕

⑥同 4 年 2 月：西三階櫓の付櫓の野地板修繕、軒裏板の取替、瓦葺の漆喰仕上げ

寛政 12 年（1800）から文政 4 年まで 22 年間という比較的短い期間に頻繁に建物の修復を行っていた実態が分かる。特に②文化 4（1807）年 4 月から 8 月にかけては東三階櫓と附櫓を建て替えるという大規模な修復を行っている。また、前章で触れた大正 5 年 6 月 5 日付け「福岡日日新聞」の記事には､西三階櫓から文化 4 年 9 月落成の修理銘が入った棟札が､東三階櫓からは天保 2 年（1831）新規建替を行った旨の記載がある棟札が見つかったとの記述がみえる[16]。西三階櫓の棟札は上記③の修復を指していると推測されるが､東三階櫓の棟札の記述は上記のいずれにも合致しない。とすると、東三階櫓は上記②の新規の建て替えに加え天保 2 年にも建て替えていたと考えられる。この短い期間で 2 度も建て替えを行った要因には、文政 11 年 8 月、福岡藩領内に甚大な被害をもたらした「子年の大風」があった。浜ノ町黒田別邸への武具櫓移築落成の際に行われた、旧福岡藩士明石半十郎の講話でも文政 11 年の大風によって武具櫓が倒壊した旨が言及されている[17]。よって、文化 4 年に建て替えられた東三階櫓は文政 11 年 8 月の大風で倒壊し、天保 2 年に再建がなったと推測されるのである。

第４項　武具櫓の機能

武具櫓が本丸南側を守衛するために建てられた櫓であることは、前述した慶長 6 年 9 月朔日の黒田長政書状の記述から明らかである。福岡城の本丸は、南側にある赤坂山から連なる丘陵地の先端部に築かれており、防御のため丘陵地は城の南側で切り開かれて堀が設けられていた。江戸時代に福岡城が攻められたケースは無いが、実戦の場面では武具櫓は南側からの攻撃を防ぐ重要な役割を担ったものと推測される。

また、武具櫓には、その名称の通り武具類が収められていた。前述した文化期頃の作成と推測される「御櫓奉行預御道具入覚」によれば、武具櫓のうち東西三階櫓には「御召具」が、二層の多聞櫓の「二階通り」には「諸御道具」､「廊下通り」には「御番具」が収納されていたという。ここで言う「御召具」とは藩主が所用した武具類のことを指していると思われる[18]。また、同じ史料に収録される「惣合薬斤数并箱数之覚」には合薬（火薬）8 万 3,497 斤余が武具櫓に収められていると記されている。

このうち「諸御道具」や「御番具」の実態についてうかがい知れる史料として、文政 2 年に御武具櫓奉行濱田義八郎ら 3 名が、受持の御用聞伊丹九郎左衛門に提出した「御武具櫓諸御道具現調子帳[19]」という帳面がある。この帳面は、武具櫓に収納されている物品の現物確認を行い、台帳との差

15　檜垣文庫 5-6（九州大学附属図書館付設記録資料館九州文化史資料部門所蔵）

16　前掲　石瀧論文 70 頁・81 頁、『福岡城』88 頁

17　大正 5 年 10 月 1 日付け「福岡日日新聞」。前掲石瀧論文 82 ～ 83 頁に掲載。70 頁でも言及。『福岡城』88 頁

18　三奈木黒田家文書 1495（九州大学附属図書館付設記録資料館九州文化史資料部門所蔵）、『福岡城』88 頁

19　伊丹家資料 520（福岡市総合図書館蔵）、『福岡城』89 頁でも言及。

異をまとめたもので、348 項目にのぼる物品の数量や状態、過不足などが記されている。ここで記載された物品の種類や員数などを全て紹介することは紙幅の関係から出来ないが、主なものを挙げると次のようになる。

①御旗 165・御昇 6・招 10・しなへ 11・御旗竿 70 など軍旗に関するもの

②御陣鐘 21・陣太鼓 1・押太鼓 48・陣貝 24 など

③御番弓 388・征矢柄 3,955・矢ノ根 18,684・塗白弓弦 478 など弓および弓道具類

④鞍 42・鉄木地鐙 28・轡 19・馬面 6・馬鎧 15・馬柄杓 2 など馬具類

⑤大鳥毛御鎗 3・小鳥毛御鎗 1・御直鎗 100・御番鎗 1,175 など鎗および鎗拵類

⑥御番具足 379・三ツ具足 757・金甲 213・布小手 363・革笠 669 など御貸具足類

⑦置筒 92・抱大筒 53・小筒 1,900・木綿火縄 1,831・竹火縄 36,911 など銃砲関係

⑧三百目鉄玉 150・籠鉛玉 1 貫 400 目・竿鉛 1482 斤余など鉄砲の玉とその原材料

⑨上塩硝 1 万 902 斤余・硫黄 5,101 斤余など火薬および火薬の原材料

⑩鉋 348・鎌 173・斧 247・前掻 108・鶴嘴 76 など普請・作事関係の道具類

この他にも鉄鍋・銅鍋・火鉢・手箒・棕櫚箒などが記されている。この帳面に記載されている物の多くは二層の多聞櫓に収められた「御番具」や「諸御道具」に該当するものと思われるが、弓や鎗、具足をはじめとする武具類に加え多種多様な道具類が収められていたことがうかがい知れる。

福岡藩士周防家には、蓋裏に「文政拾寅年、金甲弐拾入、御武具櫓　壱」と墨書のある木箱が伝来しており、ここから武具櫓には金甲が木箱に入れた状態で収められていたことが分かる。なお、この木箱の底裏に「明治三年午五月日、御櫓之品々依而改革御拂下ケニ相成候節、鳥居氏頼拝借之者也」とも墨書があり、明治 3 年 5 月に武具櫓に収納されていた品々が払い下げられたことも分かる。[20]

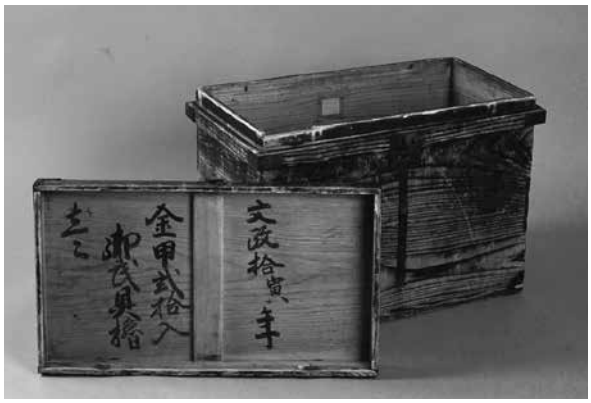


Fig.2　木箱（周防憲男資料 1）福岡市博物館所蔵

「御召具」との関連で見れば、正徳 5 年（1715）7 月に家老吉田栄年が御旗奉行竹森貞矩や城代頭、目付頭らと武具櫓に入り、当時所在不明となっていた孝高・長政所用の中白の御旗 19 流、同御旗（三幅折掛）19 流、混白吹貫御馬験 2 流を櫓内で見つけた記事が「吉田家傳録」に見える。[21] また、元文 2 年（1737）当時、東蓮寺（直方）藩初代藩主黒田高政所用の御馬印が武具櫓に収められていたこともうかがい知れる。直方藩は享保 5 年に藩主黒田長清死去にともない本藩の福岡藩に返付されていたため、高政の御馬印も福岡城に収められたものと考えられる。なお、この馬印は黒田二十四騎の一人である吉田長利の「鷺ノ丸」の指物を、高政が長利の息子重成に求めて馬印としたもので、火災で先祖の武具類を失った吉田栄年の願いにより元文 2 年 8 月に吉田家に譲られた。[22]

また、前述の「御武具櫓諸御道具現調子帳」には「青山御琵琶」と「御陣駕」が書き上げられている。前者は、天文 18 年（1590）、豊臣秀吉が小田原城の北条氏を攻めた際、降伏の仲介をした礼として北条氏直が黒田如水に譲ったとされる琵琶。後者は名称から戦場で使用された駕籠と推測され、黒田

20　周防憲男資料 1（福岡市博物館所蔵）、『福岡城』95 頁

21　檜垣元吉監修『福岡藩　吉田家傳録』中巻（太宰府天満宮、1981 年）254 ～ 5 頁、『福岡城』88 頁

22　前掲『福岡藩　吉田家傳録』下巻 157 頁・270 頁、『福岡城』88 頁

家別邸移築後の武具櫓の二階部分に黒田如水が使用した陣輿が収められていたとの証言[23]もあることから、如水所用の陣駕であった可能性を指摘しておきたい。このように武具櫓には多種多様な武器・武具、道具類などに加え、黒田家の当主ゆかりの武具や道具類などが「御召具」として保管されていたことが分かる。

第５項　明治維新後の武具櫓

明治２年（1869）６月の版籍奉還後、翌３年３月には福岡城に藩政庁と司計局・監察局が設置されたが、太政官札贋造発覚により同４年７月廃藩置県となり、以降は本丸と二の丸は兵部省（陸軍省）、三の丸は大蔵省（後に内務省）の管轄となり、三の丸に県庁が設置された。明治９年７月に県庁が天神町に移転すると三の丸も陸軍省の管轄となり、同 19 年５月、陸軍歩兵第 24 連隊が小倉城から福岡城に転営し、翌月連隊本部が設置された。明治 35 年の「福岡衛戍略図[24]」によれば武具櫓は仮兵舎と使用されていたことが分かるが、同 38 年１月、日露戦争の旅順占領にともなうロシア軍俘虜 1,000 名が福岡に到着したため、522 名が武具櫓に収容された。その後、明治 39 年には武具櫓を日露戦争の戦利兵器格納所として使用することとなり、弾薬を格納するため避雷針が設置された。

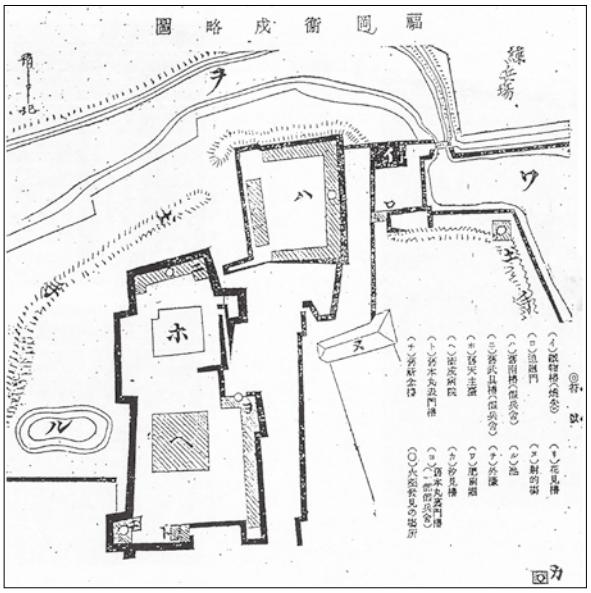


Fig.3　福岡衛戍略図（南が上）

大正５年２月、福岡市長井手佐三郎は名勝史蹟の記念物として永遠に保存するため、武具櫓と本丸裏御門、古時打櫓の払い下げを陸軍省に申請して許可された。武具櫓・本丸裏御門・古時打櫓は福岡浜ノ町の黒田家別邸内に移築されることとなり、同年９月 29 日に落成式が挙行された。

移築後の武具櫓は、多聞櫓の２階部分は黒田家の倉庫として武具や古文書などが収められ、１階部分は大広間として集会等に使用したという。昭和 20 年（1945）になると海軍に接収され将校宿舎として使用されたが、同年６月 19 日の福岡大空襲により全焼し、収められていた品々も灰燼に帰した[25]。

Fig.4　絵葉書「福岡城武具櫓」（大正５年以後）

23　大野満壽子「黒田別邸の四季」（『ふるさとの自然と歴史』第 340 号、2011 年）20 頁。大野氏の父梅崎亮吾氏は、大正～昭和期に 30 年余り黒田家別邸の家扶を務めた方。大野氏によれば武具櫓の二階に女乗物と如水が使用した木製の陣輿があったという。

24　『福岡日日新聞』明治 35 年８月７日、「福岡衛戍変災彙報」より

25　大野満壽子「黒田別邸の四季」、『福岡城』96 ～７頁

第２章　武具櫓跡の調査

第１節　遺構について

第１項　周辺環境と調査の概要

武具櫓は本丸南端の曲輪の南面石垣上に位置する。この曲輪は天守周囲を守る曲輪群の一角をなし、天守曲輪の一つに数えられることもあるが、本稿では独立した曲輪と捉え武具櫓曲輪と仮称する。武具櫓曲輪は石垣天端で北辺 74m、南辺 64m、南北約 40m の平面逆台形を呈す。南側の二の丸平坦面との比高差は約 20m あり、福岡城における屈指の高石垣をなす。この石垣は、角石は花崗岩割石による算木積みで一部に角脇石を部分的に用い、築石は玄武岩野面石を主体とした布目崩し積みである（Fig.6・7）。福岡城石垣分類では B 類石垣[1]であり、市川分類では福岡城Ⅱ期[2]である。武具櫓の建物構造については江戸時代の文献、明治期古写真（巻頭１上）、黒田別邸移築後の記録と写真、現況の曲輪測量および露出礎石などから文献史学および建築学の観点からが検討が行われている[3]。また、西三階櫓と鉄砲櫓を結ぶ西面石垣上と東三階櫓と小天守台を結ぶ東面石垣上には、幕末期には土塀が掛けられていたが、土塀が築城期まで遡るのか、あるいは渡櫓状の一層多聞櫓が建てられていた

1　福岡市教育委員会 2006『福岡城跡保存整備基本構想』
2　市川浩文 2012「九州における近世城郭石垣の変遷について（2）」『城郭石垣の技術と組織－金沢城史料叢書 16 －』（石川県金沢城調査研究所）
3　三木隆行 1994「本丸の櫓」『福岡城の櫓』（福岡市教育委員会）
　佐藤正彦 2001「武具櫓」『甦れ！幻の福岡城天守閣』（河出書房新社）
　『福岡城』87 頁

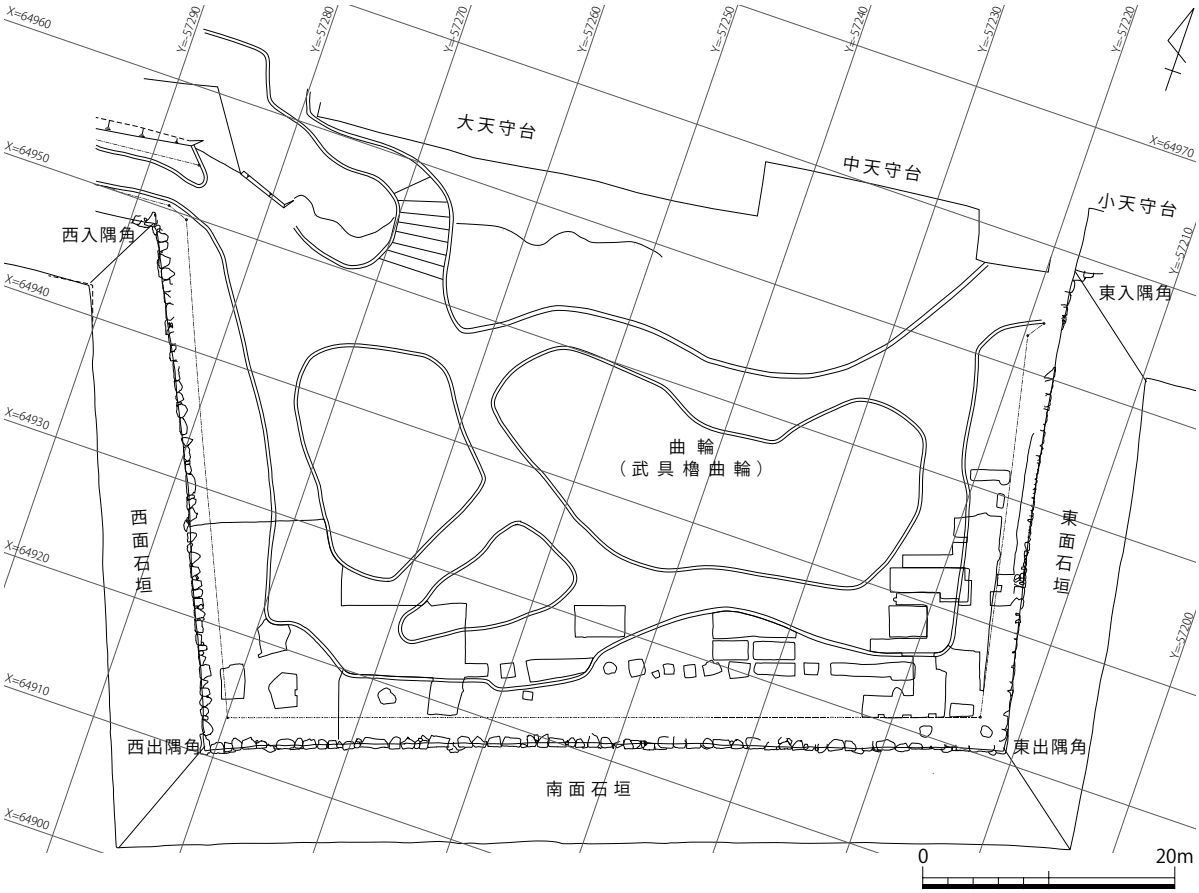


Fig.5　武具櫓曲輪周辺現況図および調査区位置図（1/600）

Fig.6　南面石垣・西出隅角　（南から）

Fig.7　南面石垣・東出隅角　（南東から）

Fig.8　東面石垣・小天守台東面石垣（北東から）

Fig.9　武具櫓曲輪（大天守台から西出隅角を望む）

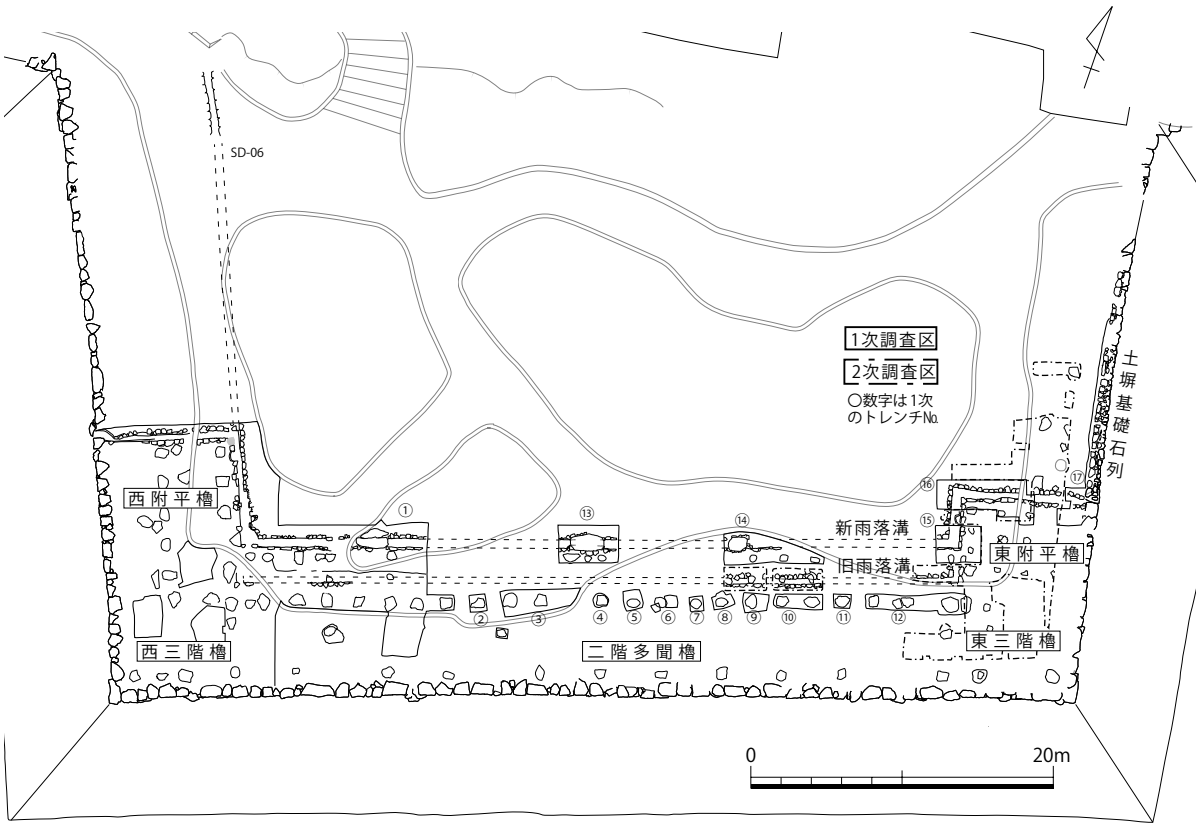


Fig.10　武具櫓跡各部名称および 1 次・2 次調査区（1/500）

時期があったかについては、絵図の解釈をめぐって異説がある[4]。今回の発掘ではこれらの先行研究を元に、調査区を西附平櫓・西三階櫓部、二階多聞櫓部、西附平櫓・西三階櫓部に分け、1 次調査では西附平櫓・西三階櫓部の全体調査、二階多聞櫓部・東附平櫓部の調査、東西南面石垣の天端部調査、武具櫓曲輪全体の平板測量も行った（Fig.5）。2 次調査ではその補足として東三階櫓と雨落溝、土塀背面および東附平櫓北側の発掘調査を行った。調査時は南面石垣天端方向を基軸とした任意の座標に

4　前掲 三木 1994、前掲 佐藤 2001

Fig.11　西三階櫓・西附平櫓部平面図（1/100）

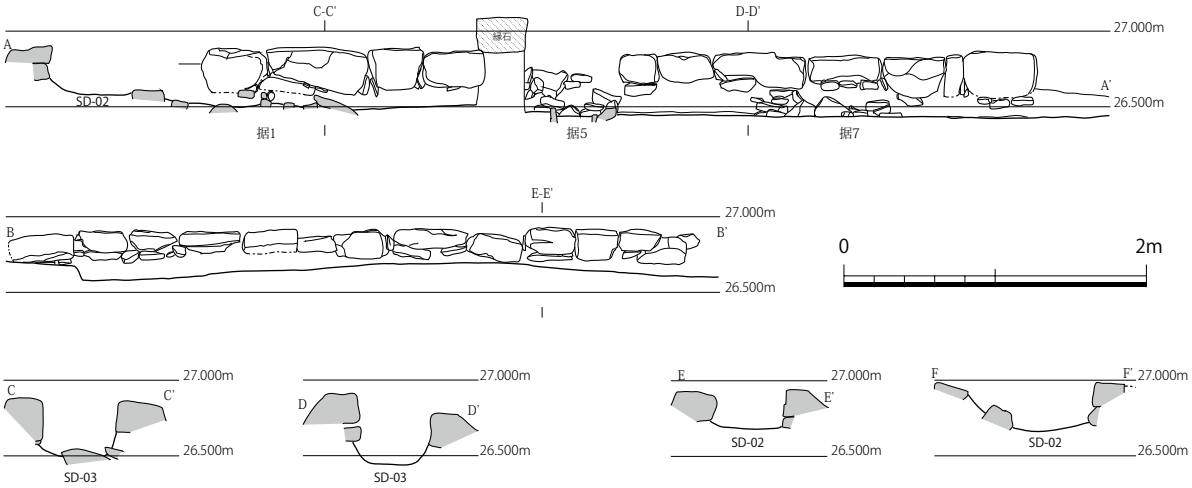


Fig.12 西附平櫓部　雨落溝 SD-02・03　断面・見通図（1/50）

Fig.13 Tr.① 表土除去後 礎石検出状況（北から）

Fig.14 Tr.① 鉛塊出土状況（北から）

Fig.15 Tr.①北側　西附平櫓部（北から）

Fig.16 Tr.① 北側　西附平櫓部（東から）

よって基準点測量を行い、３ｍメッシュに基づいた 1/20 縮尺遺構実測を実施し、任意座標については世界測地系座標を付与した。また、本稿では 1 次調査での発掘調査区を Tr.①②③…とし、2 次調査での発掘調査区を 1 区 2 区 3 区…とする。また、沓脱石・礎石ないしその可能性ある石については 01~229 まで通し番号を付し、礎石 01、沓脱石 100、石 106…とする。

第 2 項　西附平櫓・西三階櫓部

武具櫓曲輪西出隅角から西・南面石垣の天端際を含む、東西約 11m 南北約 18m の調査区で、桜周囲を除いたほぼ全域を調査した。1 次調査の Tr.①西側部分にあたる。現地表面と遺構面との比高

Fig.17 Tr. ① 南側 西三階檐部（北東から）

Fig.18 西面石垣天端・SD-03 排水部（北から）

Fig.19 Tr. ① SD-02（北から）

Fig.20 Tr. ① SD-02 瓦出土状況（東から）

Fig.21 Tr. ① SD-01・02 合流部（南から）

Fig.22 Tr. ① 礎石 53・57 および礎石据付穴 2（東から）

Fig.23 西出隅角天端・裏込石・礎石 01 表土除去後 （東から）

Fig.24 南面石垣天端・裏込石・礎石 02-04 表土除去後（西から）

差があまりなく、調査前の段階で既に地表面上で一部の礎石が露出していた。また、深 10㎝前後の全体掘削で多くの礎石を検出でき（Fig.13）、当調査区においては現地表と旧地表面はとほとんど変わらない標高だったと考えられる。特に全体掘削中に X=64919.1、Y=-57268.2 付近で出土した鉛塊は融解した鉛が旧表土に垂れ落ち、傾斜する南側へ流れて固まったものである。時期は不明だが、移築前に櫓内から旧表土に垂れ落ちた可能性が高い。

礎石とみられる石 23、礎石据付穴 10、雨落溝 1 を検出した。礎石は大別すると南北方向に 2 列（礎石 04・18・23・49・51・53・55・57 および礎石 03・20・48・50・52・54・56）、東西方向に 1 列（礎石 01・02・03・04）並んでいる。平面角 50cm ～ 1m 前後、厚さ 50cm 以下の自然石を礎石として用いており、種類は玄武岩や花崗岩などからなる。平行する礎石 03-56 列と礎石 04-57 列との距離は 4 m前後である。

コンクリート製縁石設置時に多くの礎石を移動しており、礎石 77・78 は原位置外れ、縁石に近い礎石 25・49・51・52 も原位置外れの可能性が高い、また、礎石 47・75・76 も移動された可能性がある。工事の影響はあるが全体に礎石自体は数多く残り、西三階櫓・西附平櫓の移設において礎石は対象外だったようである。

礎石据付穴は礎石を据えるために 10cm 前後の石を径 1 ～ 1.5m の穴に詰めたもので、10 か所確認できた（以下、据 1 …とする）。据 9 ～ 11 は礎石も原位置のままに近いが、据 2・4・8 は礎石と据付穴がずれる（Fig.22）。ただし、雨落溝 SD-03 に切られる据 1・5・7 や、礎石を伴わず礎石列からも外れた据 3・6 については、移築前建造物より古く、柱筋や礎石を変更するような大規模な櫓の建替が 2 回以上、江戸期に行われた可能性が高い。

雨落溝は武具櫓の北側全体に設置されており、当調査区では東附平櫓の北・東側に沿うように走る。溝に底石は置かず素掘りのままで、幅 30 ～ 50cm、高 20 ～ 30cm の自然石の平らな面を溝の側石として用いている。雨落溝のうち多聞櫓部北側の東西方向溝を SD-01、西附平櫓東側の南北方向溝を SD-02、西附平櫓北側の東西方向溝を SD-03、直進し大天守台方向へ向かう溝を SD-06 とよぶ。SD-01 は X=64923、Y=-57265.7 付近で北に折れ SD-02 となり、SD-02 は X=64929.5、Y=-57268.8 付近で西に折れ SD-03 となり、そのまま西面石垣天端とつながる。石垣には吐水口は設けずそのまま天端から排水する（Fig.18）。また SD-03 は据 1・5・7 を切っている。 SD-02 の一部はそのまま北上し SD-06 とつながり武具櫓御門に通じる坂から本丸外へ排水される。SD-02・03 ともは幅 50㎝前後で、深さは SD-02 が 30cm 前後、SD-03 が 40cm 前後である。天端付近では各天端石尻より裏込石がまとまって検出された。天端際に土台柱を通すための加工とみられる（Fig.23・24）。

第 3 項　二階多聞櫓部

調査区は西三階櫓との接合部と北側の礎石列（礎石 24 ～ 46）、沓脱石とみられる 3 石（沓脱石 100 ～ 102）とその周辺を中心にトレンチを設定した。1 次調査 Tr. ①東側・Tr. ②～⑭、2 次調査 10・11 区が該当する。また南面石垣の天端石背面の検出をおこなった。二階多聞櫓部は東西約 47m 南北約 9m と長大なため、西部（Fig.27）・中央部（Fig.32）・東部（Fig.40）に分割して報告する。

西部

東西方向 4 列の礎石列（礎石 05 ～ 07、礎石 24 ～ 32、礎石 58 ～ 62・81、礎石 79・80）、沓脱石（石 100）、雨落溝 2 条（SD-01・07）を検出した。調査前から露出した礎石列が観察できた場所であり、礎石 27 は刻印のある石として注目されていた[5]（Fig.26）。2 つの礎石列（礎石 24-32 列、礎石 58-81 列）

5 『福岡城』88 頁

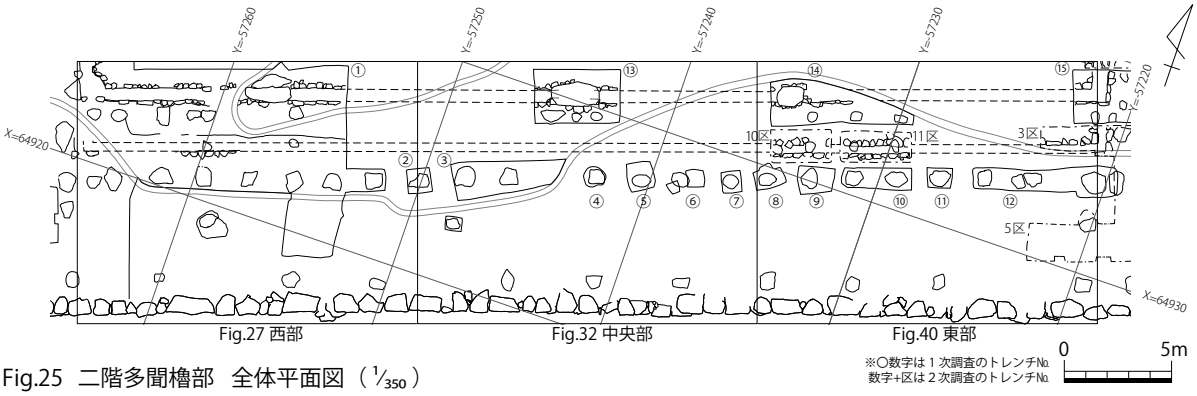


Fig.25　二階多聞櫓部　全体平面図（1/350）

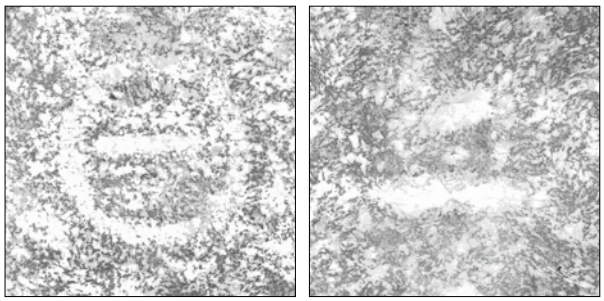


Fig.26　礎石 27（調査前・東から）および礎石 27 刻印
「○に一」「ニ」拓影（縮尺不同）

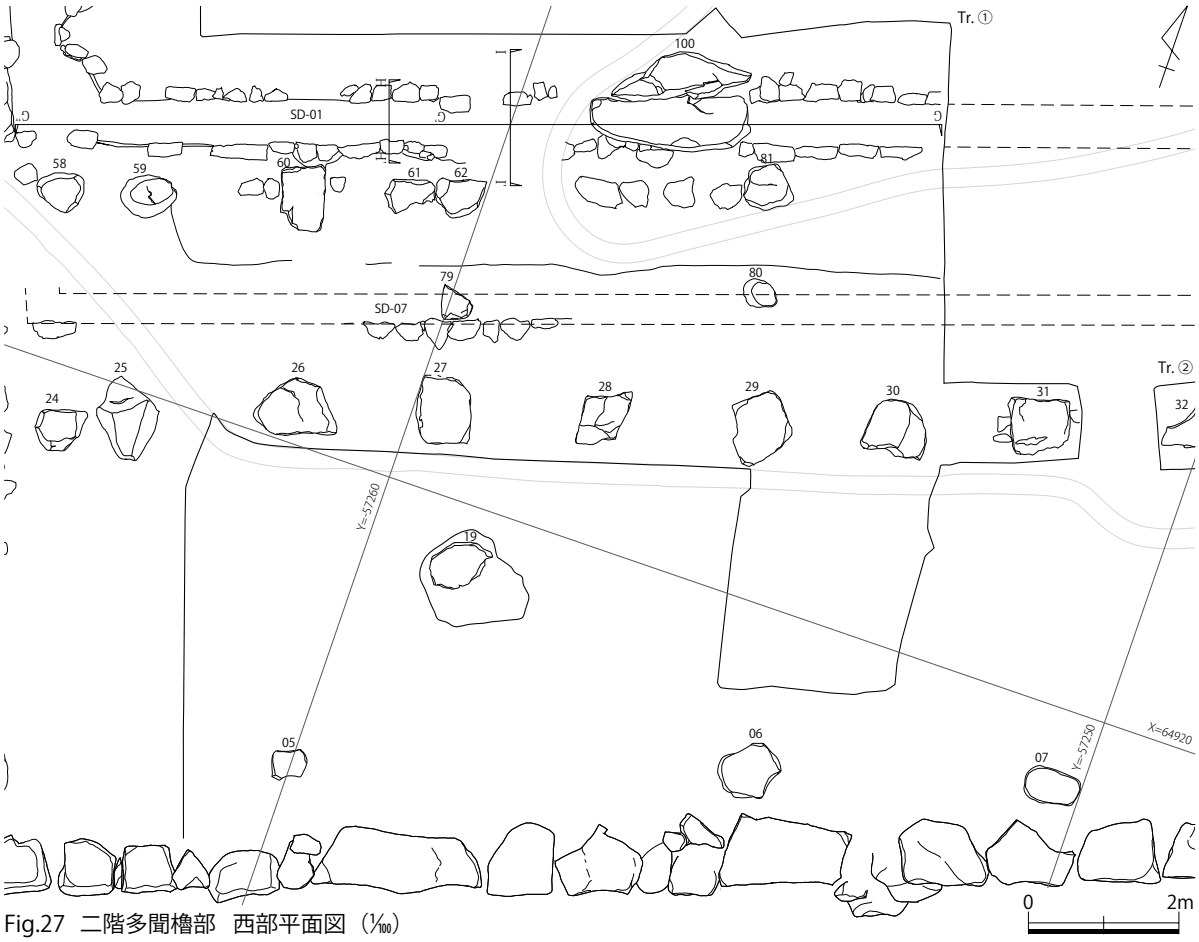


Fig.27　二階多聞櫓部　西部平面図（1/100）

Fig.28 礎石 29・28・27・26・25（調査前・東から）

Fig.29 Tr. ① 武具櫓跡西半部・沓脱石 100（東から）

Fig.30 Tr. ① SD-01・07（北から）

Fig.31 Tr. ① SD-07・裏込石・礎石№ 27（西から）

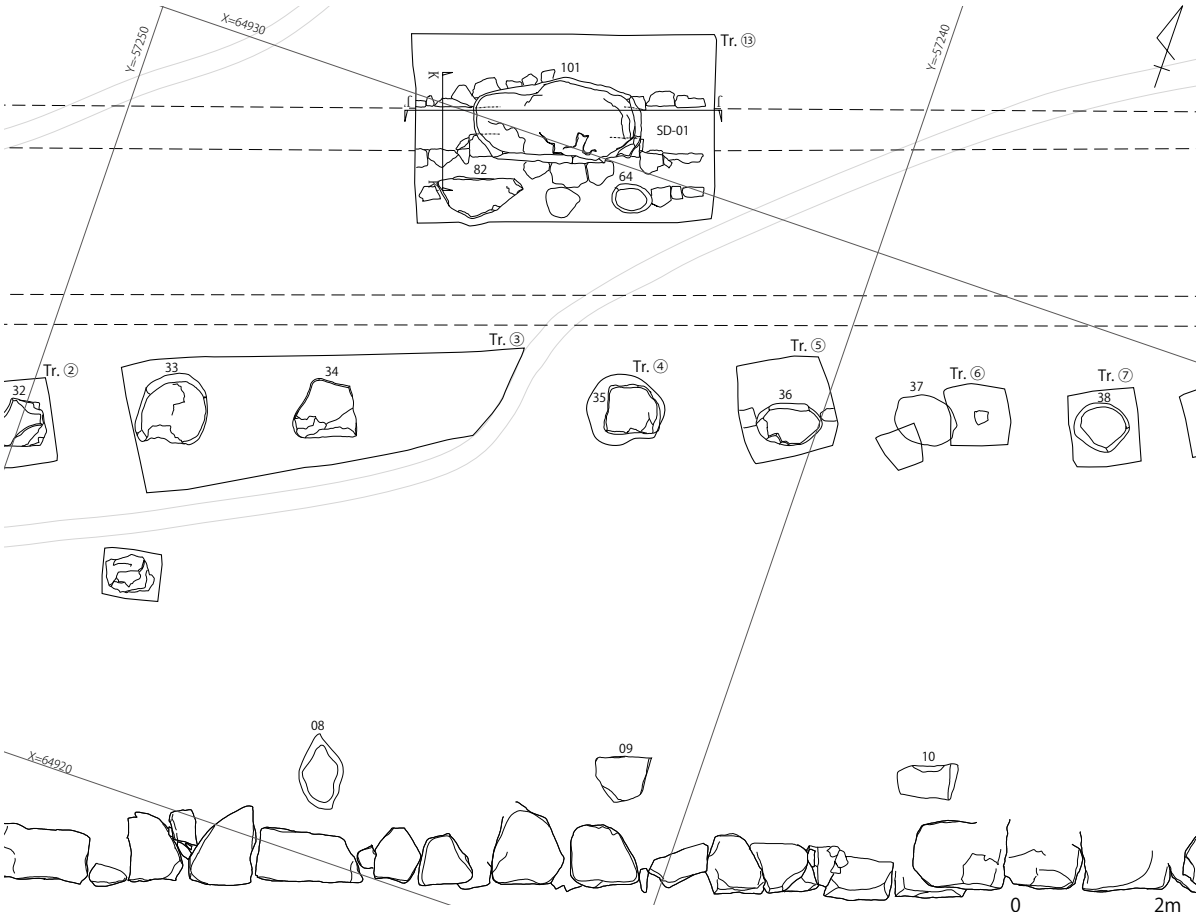


Fig.32 二階多聞櫓部 中央部平面図（1/100）

※ Tr.○数字は 1 次調査のトレンチ№
数字 + 区は 2 次調査のトレンチ№

が西三階櫓と接続するが、礎石 58-81 列と西三階櫓南北方向の礎石列と交わる場所に礎石が検出されなかった。また、礎石 24-32 列の礎石は西三階櫓の礎石と同大だが、礎石 58-81 列の石はやや小さく平面 1 m 角以下である。また礎石 59~60、礎石 62~81 間には径 50cm 以下の小さい自然石が並べられ、礎石 58-81 列の礎石間には元来地覆石が置かれていたようだ。礎石 24-32 列・58-81 列の石間の距離は 1.8 ～ 2.2m でほぼ等間隔に並ぶ。石 100 は 2m × 1.5m と他の礎石に比べ倍以上の大きさがあり、縁石工事の影響のためか半分に割れているが、SD-01 をまたぐように置かれており、多聞櫓に入る扉の前に設置された沓脱石であろう。

雨落溝 SD-01 は幅 60cm 前後深さ 30cm で東西方向に走り、SD-02 比べ幅広である。側石も幅

Fig.33 Tr. ① 沓脱石 100・SD-01（北から）

Fig.34 Tr. ⑬ 沓脱石 101・SD-01（北から）

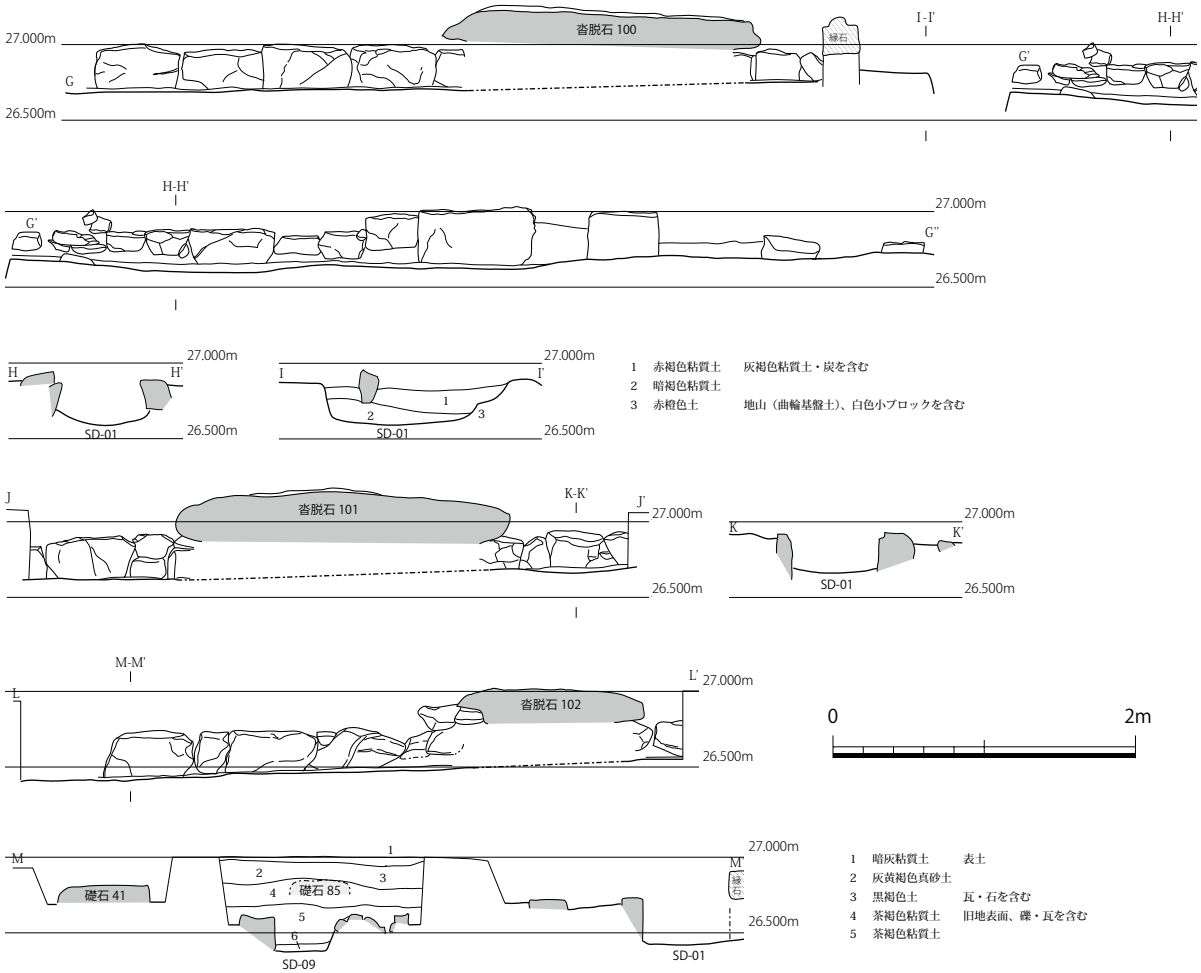


Fig.35 二階多聞櫓部 沓脱石 100・101・102 および雨落溝 SD-01・09 断面・見通図（1/50）

Fig.36 南面石垣天端・礎石 10（東から）

Fig.37 Tr.⑭沓脱石 102・SD-01 および Tr.⑧⑨⑩（東から）

Fig.38 10・11 区 SD-09（北から）

Fig.39 Tr.⑭沓脱石 102・SD-01（北から）

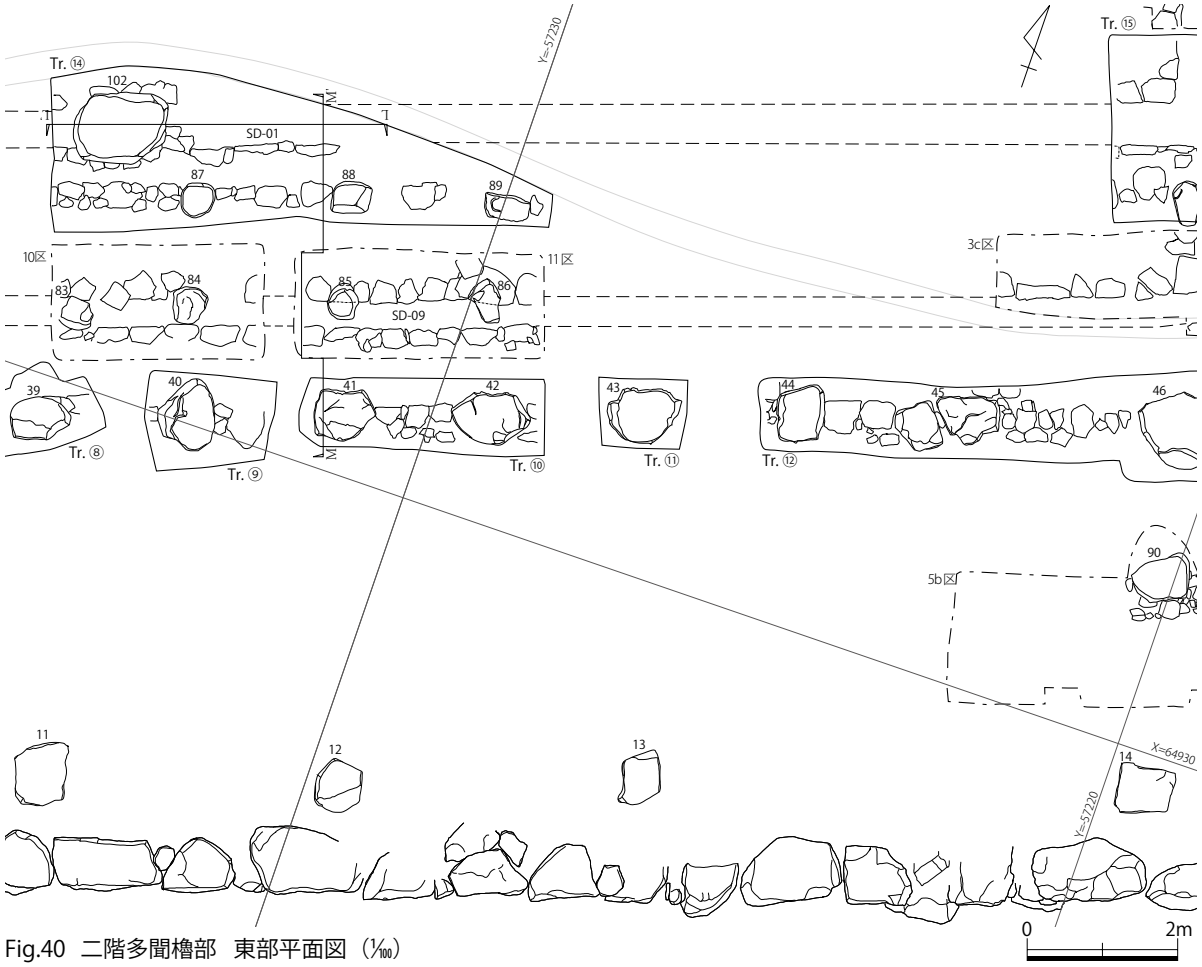


Fig.40 二階多聞櫓部 東部平面図（1/100）

Fig.41 Tr. ⑮⑯⑰ 東三階櫓・東附平櫓部（北から）

Fig.42 Tr. ⑮⑯ 東附平櫓部（西から）

Fig.43 Tr. ⑮⑯ SD-04・05（北から）

Fig.44 Tr. ⑮ SD-01・04 検出状況（北から）

Fig.45 3・5 区 東三階櫓～二階多聞櫓接合部（西から）

Fig.46 3・8 区 SD-08・09（東から）

Fig.47 3・4 区 東附平櫓部（北から）

Fig.48 3c 区 SD-08・09 合流部（南から）

60cm 高 30㎝前後とやや大きな自然石を用いている。また、礎石 27 の北側で根固石と同大の石を裏込めとした SD-07 が 1 次調査で検出されたが、2 次調査の結果により東西方向の旧雨落溝 SD-09 の一部であることがわかった。

中央部

東西方向 4 列の礎石列（礎石 08～10、礎石 32～38、礎石 64・82）、沓脱石（石 101）、雨落溝 1 条（SD-01）を検出した。礎石 24-32 列に連なる礎石 32 ～ 38 は、礎石 34・35 間の礎石が一石失われているが、ほぼ 2 m前後の等間隔で並んで検出され、原位置を保っている。石 101 は地表に露出していた沓脱石であり 2.2m × 1.1m を測る。雨落溝 SD-01 も西部と同方向同規模で検出された。

東部

1 次調査で東西方向 3 列の礎石列（石 11 ～ 14、石 39 ～ 46、石 87~89）、沓脱石（石 101）、雨

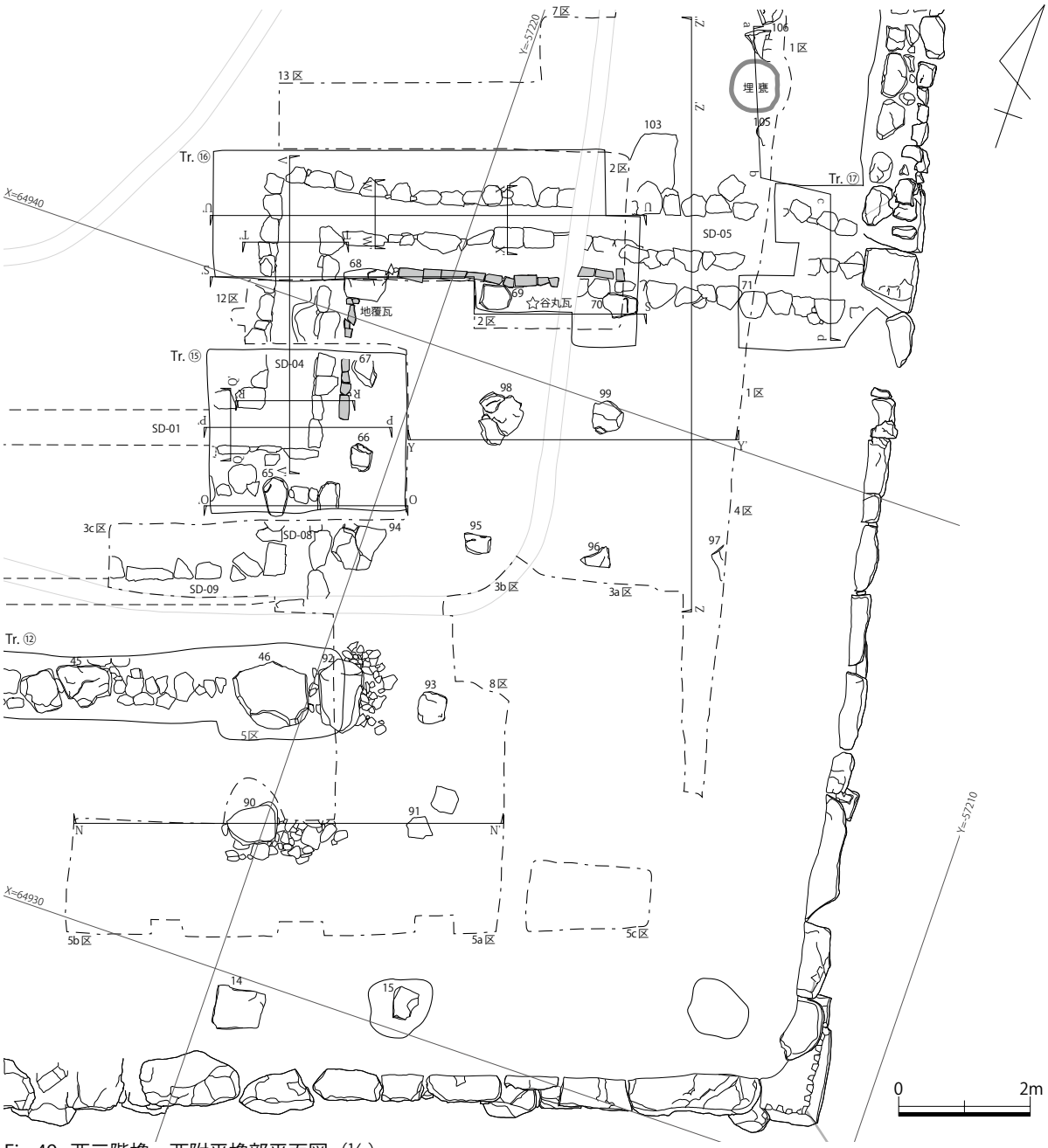


Fig.49 西三階櫓・西附平櫓部平面図（1/100）

Fig.50 Tr.⑰ SD-05 排水口・地覆石（北から）

Fig.51 Tr.⑯礎石 72・谷丸瓦・地覆瓦出土状況（北から）

落溝（SD-01）、2 次調査で旧雨落溝 SD-09、礎石列（石 83~86）を検出した。

石 102 は地上露出していた沓脱石であり 1.2m × 0.9m を測りほぼ原位置を保つ。この石 102 から東側は曲輪全体が東出隅角にむけて全体に標高が下がる。中央部に引き続き、ほぼ同大礎石 39~46 が等間隔で検出され、礎石 46・90・14 が多聞櫓の礎石列の東端にあたる。礎石 40~42 間と礎石 44~46 間では礎石間に地覆石が検出された。本来櫓の中央部に並ぶ礎石列 24-46 に地覆石を装飾する理由が不明であったが、2 次調査で礎石列 24-46 の北側に旧雨落溝 SD-09 が設置されていることが確認され、礎石列 24-46 を北側前壁柱通りとする旧多聞櫓の存在が推測された。また 2 次調査 10･11 区で旧雨落溝 SD-09 を確認した。幅 40cm 前後､深さ 20cm､平底で東西方向に走っており、SD-01 比べ幅狭である。SD-09 埋没後に礎石列 83-86 を設置している。石は径 50cm 前後で礎石列 24-46 と比べると小さく、礎石 79 と 80 はこの石列に連なる。雨落溝 SD-01 も北側石列が工事で失われているが、ほぼ同方向同規模で並ぶ。

第 4 項　東三階櫓・東附平櫓

1 次調査で雨落溝 SD-04・05 とその周囲の調査、および石垣天端の確認調査を行った。2 次調査では桜を避けた部分で東三階櫓・東附平櫓内の調査を行った。

雨落溝 SD-04 は X=-64938.1、Y=57221.6 付近で屈曲し（屈曲部Ⅰ）南北方向の SD-04 となり、X=-64941.2、Y=57222.5 付近で再屈曲し（屈曲部Ⅱ）東西方向の SD-05 となり、東面石垣から排水される。吐水口はない。標高は屈曲点Ⅰ 25.9 m、屈曲点Ⅱ 26.2 m、排水部 25.8 mと屈曲点Ⅰに雨水が集まる構造になっているが、礎石 66~68、およびその間の地覆瓦の出土状況からこの高さが櫓存在時の旧表土・雨落溝底面であったと考えられる。2 次調査 3c 区の調査時に SD-08・09 の合流する屈曲部Ⅲを検出し、SD-08 が SD-04 に、SD-09 が SD-07 につながる旧雨落溝と分かった。また、屈曲部Ⅲでは角石に石垣築石とみられる矢穴で割った花崗岩を用いていた（Fig.48）。

二階多聞櫓礎石列 24-46 と東三階櫓石列 68・67・66・94・92 は礎石 92 で交わるが、多聞櫓西端の礎石列 46・90・14 とは交わらない。また、礎石 92・94 以外の東三階櫓・東附平櫓の礎石は平面 50㎝角以下と小さい。これは移築時の持ち去りではなく、東三階櫓が幕末の二十数年足らずの間に二度も建て替えられたことと関係する可能性がある[6]。根固石が礎石 92 以外に東三階櫓・東附平櫓内にないのも同じ理由とみられる。また、二階多聞櫓と東三階櫓の礎石表面の標高差も大きく、礎石 90 と 91 の比高差は 50㎝前後あり（Fig.53）、多聞櫓一階と東三階櫓一階が繋がっていたならば、姫路城太鼓櫓のように、土台柱と床板の根太間の束を地面の傾斜に合わせて長くするなどの調整をし

6 『福岡城』88 頁および第 1 章第 3 節第 3 項

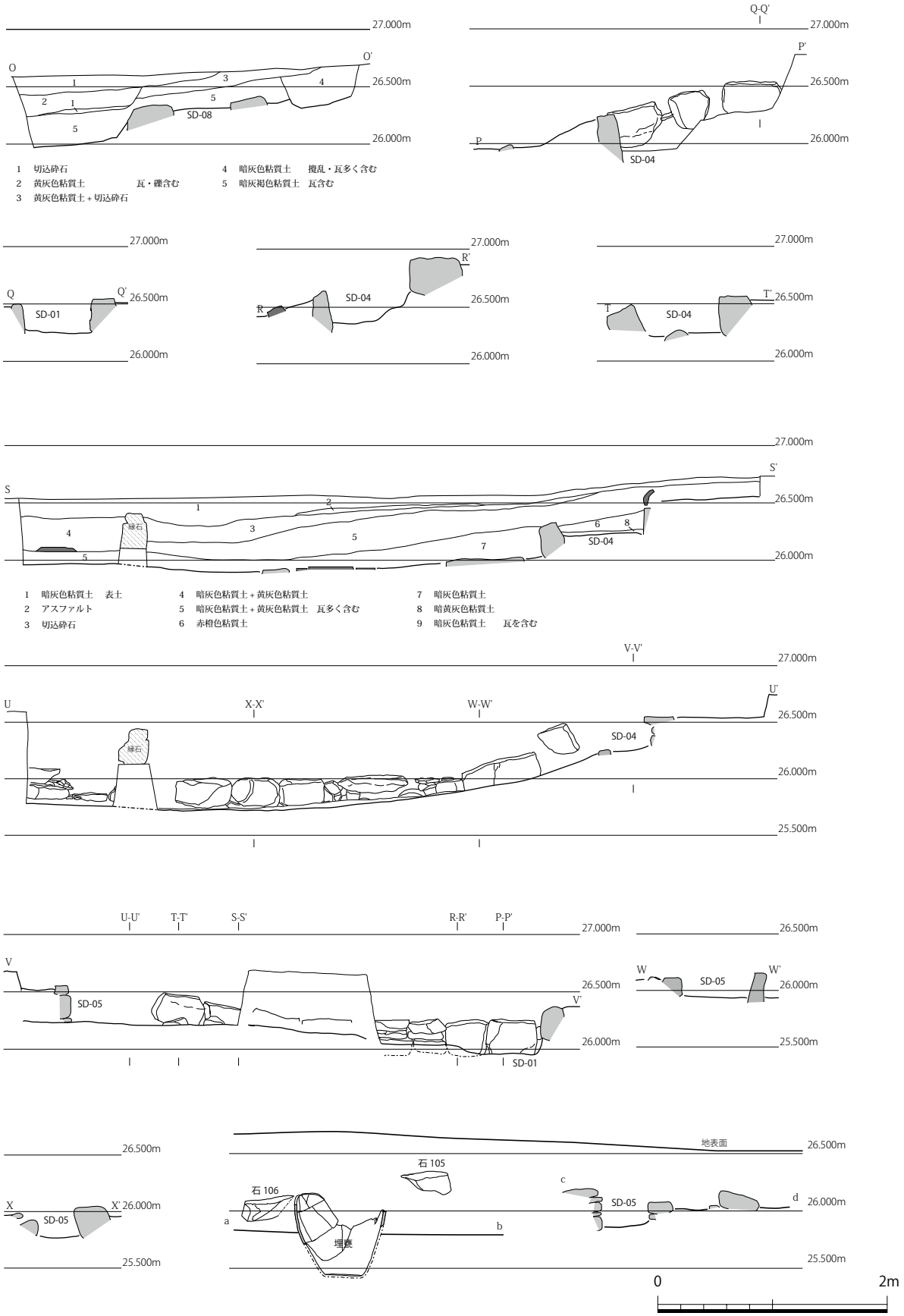


Fig.52 東三階櫓部 雨落溝 断面・見通図（1/50）

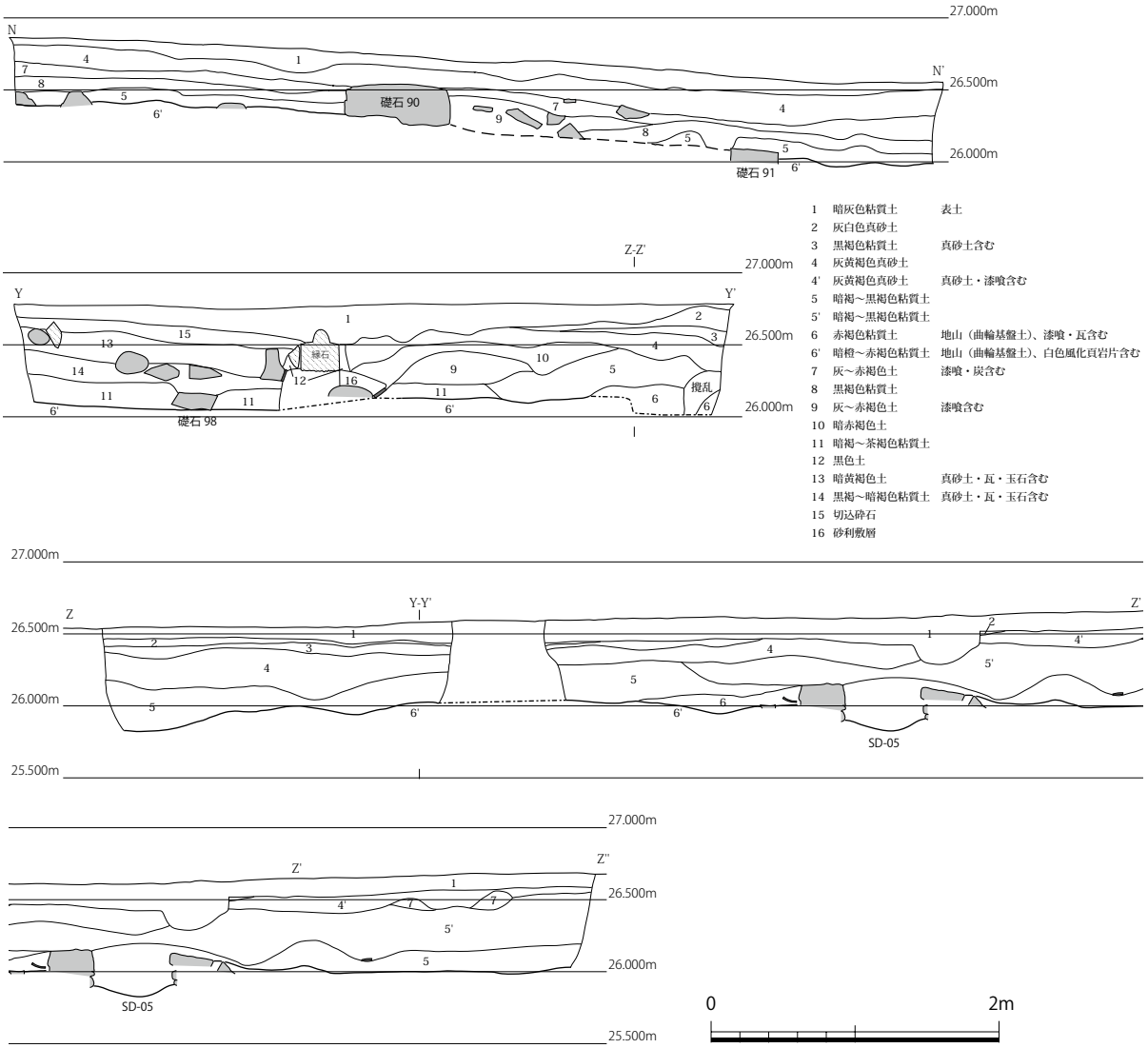


Fig.53 東三階櫓・東附平櫓部　土層断面図（1/50）

ていたであろう。

東附平櫓部では東西方向３列の礎石列（68-71、98-99、94-97）を検出したが、礎石列 98-99 と礎石列 68-92 の交わる場所に礎石はなかった。この東附平櫓の礎石列 68-66 と 68-70 の礎石間で瓦の凸面を上にして敷いた地覆瓦が検出された。礎石 70-71- 天端石の間には地覆石を並べている。雨落溝 SD-05 は Tr. ⑯東側で X=64942.3、Y=-57219.0 付近でやや幅狭となり、この辺りが沓脱石を置いた入口部だったと考える。

第５項　土塀および東附平櫓北側

１次調査で東面石垣天端を調査し、土塀基礎石列を検出した。２次調査では土塀の背後の構造確認と東附平櫓前面の状況を確認するために調査区を設定した。

雨落溝 SD-05 排水部から東面石垣天端沿いに北へ、長さ 15m 幅 0.5m の範囲で石列を検出した。石垣天端石尻上に設置しており、30cm 大で２石を用いる箇所と 50cm 大を１石用いる箇所がある。古写真から想定される東附平櫓と小天守台間に掛けた土塀の基礎石列とみられる。２次調査では安全確保可能な範囲で１北・14・９区を設定し調査を行ったところ、福岡城上之橋北側石垣で検出され

Fig.54 土塀基礎石列（北から）

Fig.55 東附平櫓北側・土塀基礎石列・土塀西側平面図（1/100）

た土塀控柱穴は検出されず、大きさや間隔は不統一だが、東面石垣方向に一直線上に石 105・106・107・108・109 が検出された。土塀基礎石列中心との距離は 2m 前後で控柱礎石列としてはやや離れており、土塀は自立式の形状であったと考えるが、姫路城ちの門旧番所塀庇のような土塀と控柱が 1 間分離れる構造だった可能性もある。

埋甕 SX-01 が石 105-106 間で検出された。胴径 80㎝、推定高 90㎝前後の備前焼大甕で、内部か

らは瓦が多量に出土したが、底面からやや浮いた状態である。東附平櫓建替時か移築時の瓦類とみられるが、甕の廃絶時期とは時間差があるようだ。この瓦以下を埋甕内下層出土遺物として取り上げた。甕底部は白色石灰状のものが付着し、便所甕として用いられたようだ（Fig.58）。次節で詳述するが、この型式の備前焼大甕は 17 世紀前半の遺構から見つかることが多く、武具櫓初期に遡る可能性がある。埋甕は甕内に落ち込んだ破片のみ取上げ、胴～底部は現地保存した。便所の立地がやや東附平櫓の戸前に近く、武具櫓に近い屋外便所と捉えるか、あるいは礎石 103・104 の並びから、絵図の解釈から想定される一層多聞櫓内部の便所とすべきかは今回の成果だけでは判断できない。雨落溝 SD-04 については 2 次 13 区の調査で北に続かないことが明らかになった。

Fig.56 1 区 東附平櫓北側部（北から）

Fig.57 9・14 区 土塀西側部（北から）

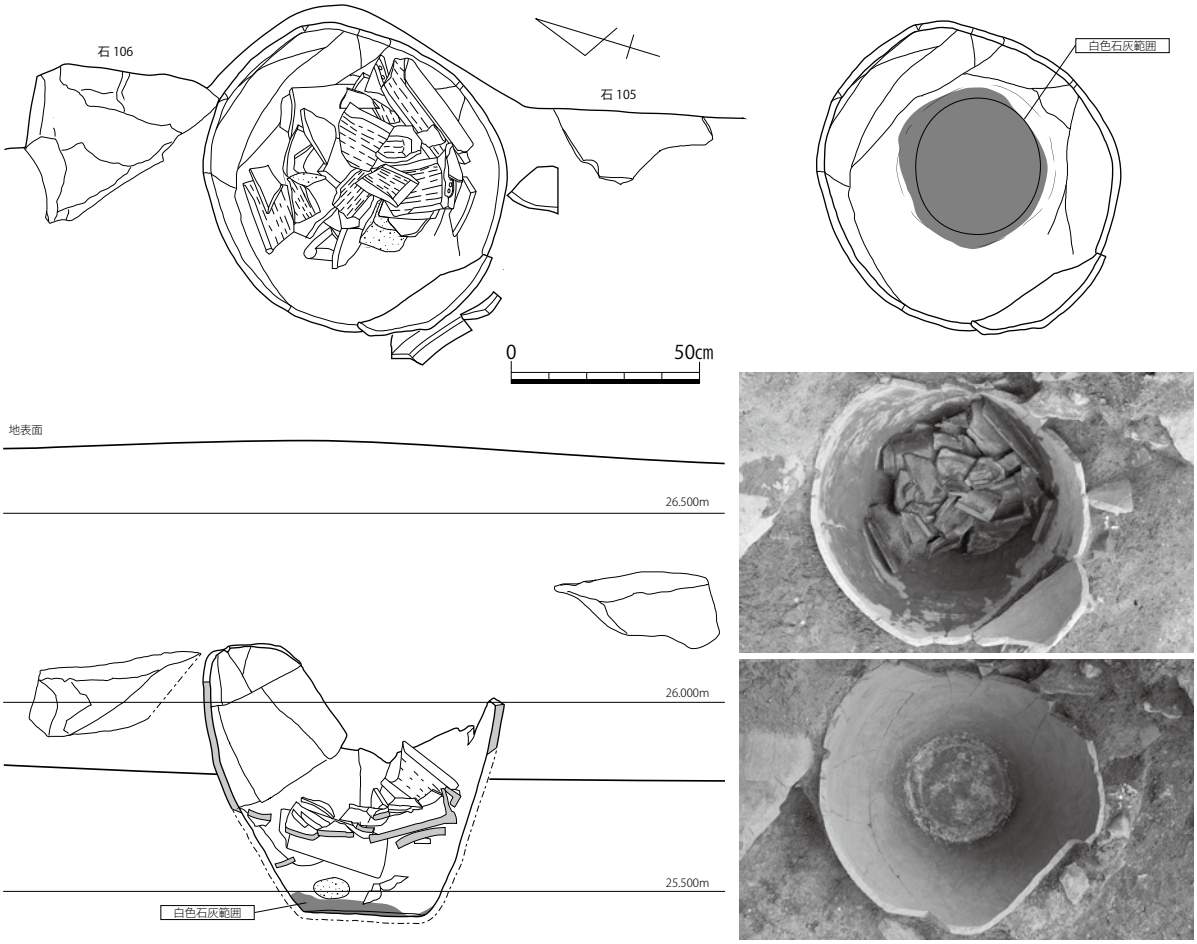


Fig.58 埋甕 SX-01 平面図、断面・見通図（1/20）および写真（上：甕内遺物出土状況、下：完掘時）

第２節　出土遺物

第１項　出土遺物概要

出土遺物は武具櫓各櫓[1]および遺構外ごとに分け、以下の項で説明する。なお、本節文中の算用数字は Fig.59~78 に表記した遺物№である。また、瓦スタンプ文・古銭等で文字判読可のものは拓本横に釈読を示した。

第２項　西三階櫓・西附平櫓部出土遺物

１~11 は軒丸瓦である。１は白餅紋を用いた軒丸瓦Ⅲ類[2]、2~11 は藤巴紋を用いた軒丸瓦Ⅱ類で、2~8・10~11 はⅡＣ類、9 はⅡＤ類か。12~25 は軒平瓦である。12 は三葉文中心飾りに唐草文を配するもので、桐葉を表現した軒平瓦Ⅱ類か蔦文の軒平瓦Ｖ類の可能性がある。13~25 は軒平瓦Ⅷ類。26~34 はスタンプ文のある瓦で、26~28・32~33 が平瓦、29 が軒丸瓦、30~31・34 が丸瓦である。35 は鬼瓦の一部である。36~37・43~44 は陶器である。44 は近代の文字赤絵の灰皿である。38~39 は白磁のミニチュア小鉢である。40~42 は土師器皿である。45 は型紙刷り肥前系染付輪花碗。46 は骨で切断痕跡がある。47~64 は鉄製品である。47・63 は鎹、49~51・53~56 は角釘、52・57 は丸釘、58 は小型丸釘、64 は鎹か鉄釘の破片、59 は板状品、48・60・62 は用途不明品である。65~67 は古銭で、65・66 は寛永通宝、67 は二銭銅貨である。68~73 は銃弾関連品で、68 は鉛製鉄砲玉、69 は鉄製砲弾、70~71 は銅製銃弾、72~73 は銅製薬莢である。74~76 は銅製品で、74 は球状装飾品、75 は飾金具、76~77 はボタンである。78~80 はガラス製品で、78 は飲料用瓶、79~80 は薬用瓶である。81 は鉛塊で、縦 33㎝・横 28㎝・高 4.5cm・重さ 6.4kg を測る。

出土位置は 1~5・7・9~21・23~25・29・31・33~35・51~53・55~56・58・70・79 が雨落溝 SD-03、69 が雨落溝 SD-06、40・45~46・60・78 が西附平櫓雨落溝、6・8・22・27~28・30・32・36~39・41~44・50・59・61・64・80 が西附平櫓、26・47~49・54・57・62~63・66~68・71~77 が西附平櫓表土、65 が西附平櫓整地層直上である。なお、81 の鉛塊は第２章第１節第２項で述べた位置から出土している。

第３項　二階多聞櫓部

82~89 は軒丸瓦である。82~86 は藤巴紋を用いた軒丸瓦Ⅱ類で、82・84~86 はⅡＣ類、83 はⅡA-1 類か。87~88 は三巴文瓦で軒丸瓦ⅠＥ類である。89 は型式不明。90 は鬼瓦か。91~102・104~111 は軒平瓦である。91・93 は三葉文中心飾りに唐草文を配する軒平瓦Ⅳ-2 類か。92 は唐草文部のみだが 91・93 に類似。94 は中心飾りに橘紋の橘部を用い、唐草文を配するもの。95 は中心飾りが下部の珠点から上向きに唐草文５本が伸びる文様で、左右に唐草文を配するもの。96・101~102 は中心飾りが上部の珠点から下向き放射状に葉文７本が伸びる文様で、左右に下向きの葉文を配するもの。97~100 は唐草文の一部である。104 ～ 111 は中心飾りに三葉文、左右に藤の花を配する軒平瓦Ⅷ類で、104 ～ 105 はⅧ-2 類である。103 は滴水瓦で、瓦当面と平瓦との接合角度は鈍角である。右には唐草文を配するが中心飾りは不明。112 は鬼瓦の一部。113・128~129 は丸

1　２次調査各区と各櫓との対照は右記の通り。二階多聞櫓西部：10・11 区、二階多門櫓 ~ 東附平櫓接続部付近：3c・5b 区、東三階櫓：5a・5c・８区、東三階櫓 ~ 東附平櫓接続部付近：3a・3b・４区、東附平櫓：１南・２・12 区、東附平櫓北側：１北・７・13 区、土塀西側：６・９・14 区

2　瓦分類および時期区分は、井澤洋一 1996「筑前における中近世瓦の分類試案」『福岡市博物館紀要』第６号を用いた。

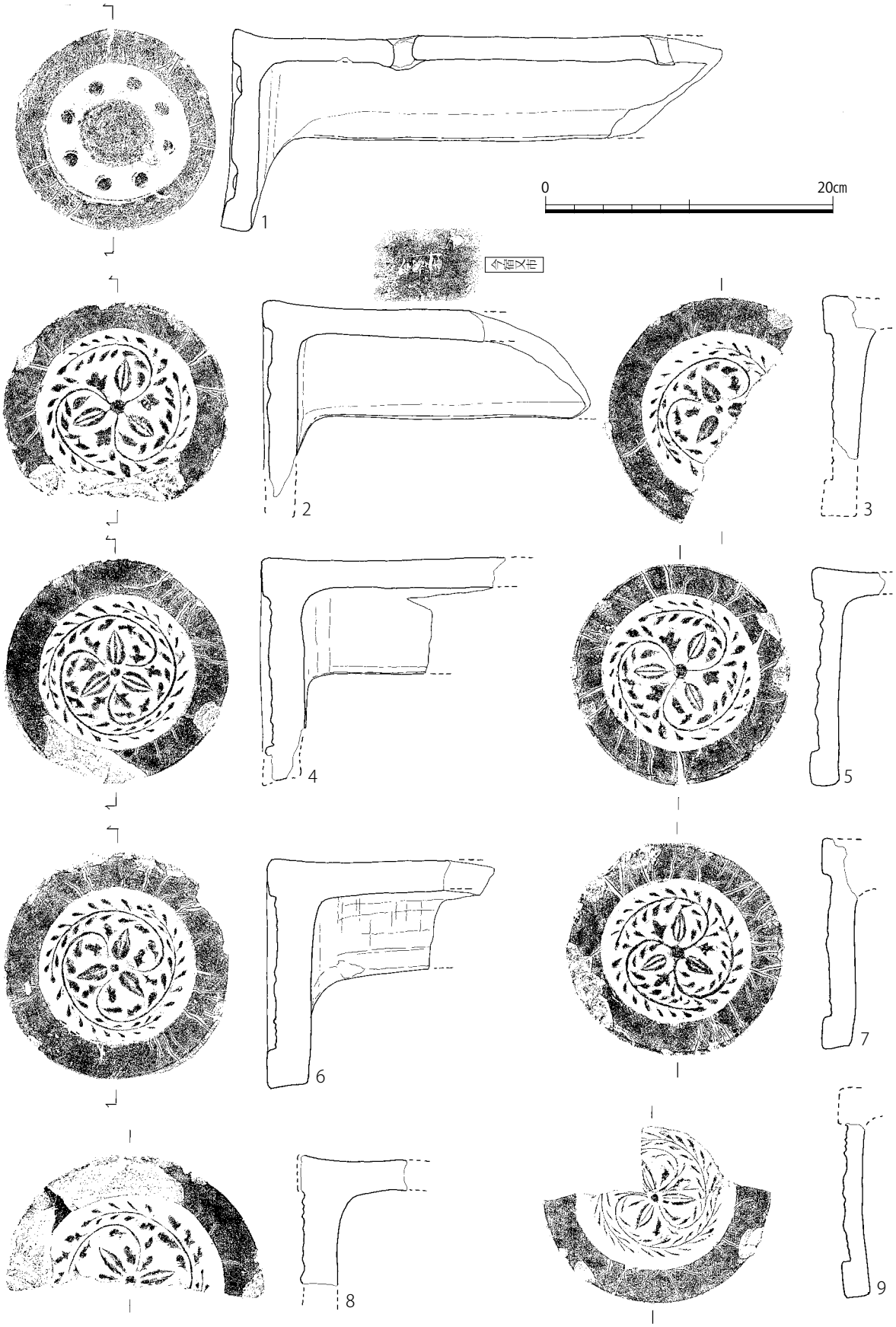


Fig.59 西三階櫓・西附平櫓　出土遺物１（1/4）

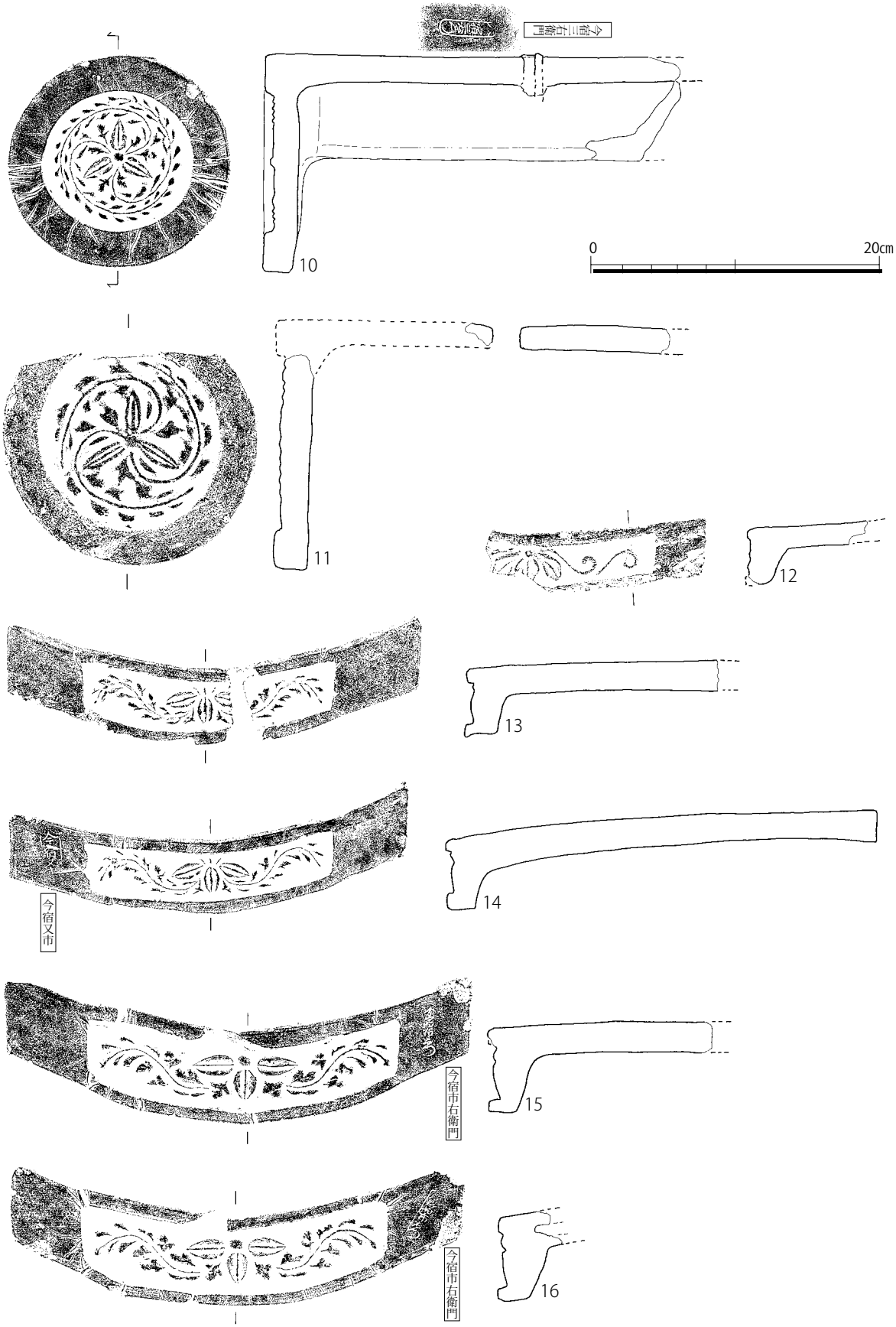


Fig.60 西三階櫓・西附平櫓　出土遺物２（¼）

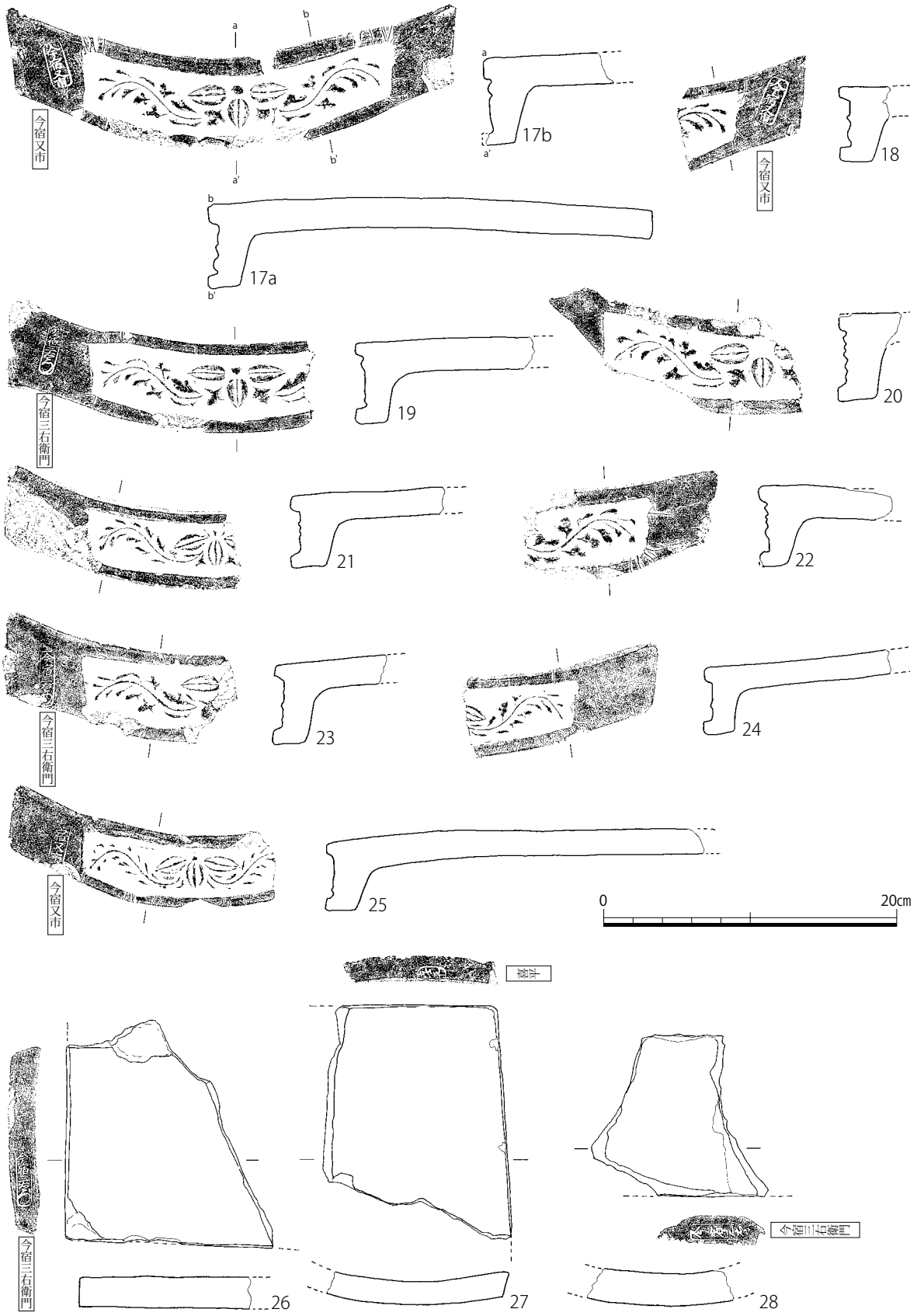


Fig.61 西三階櫓・西附平櫓　出土遺物３（1/4）

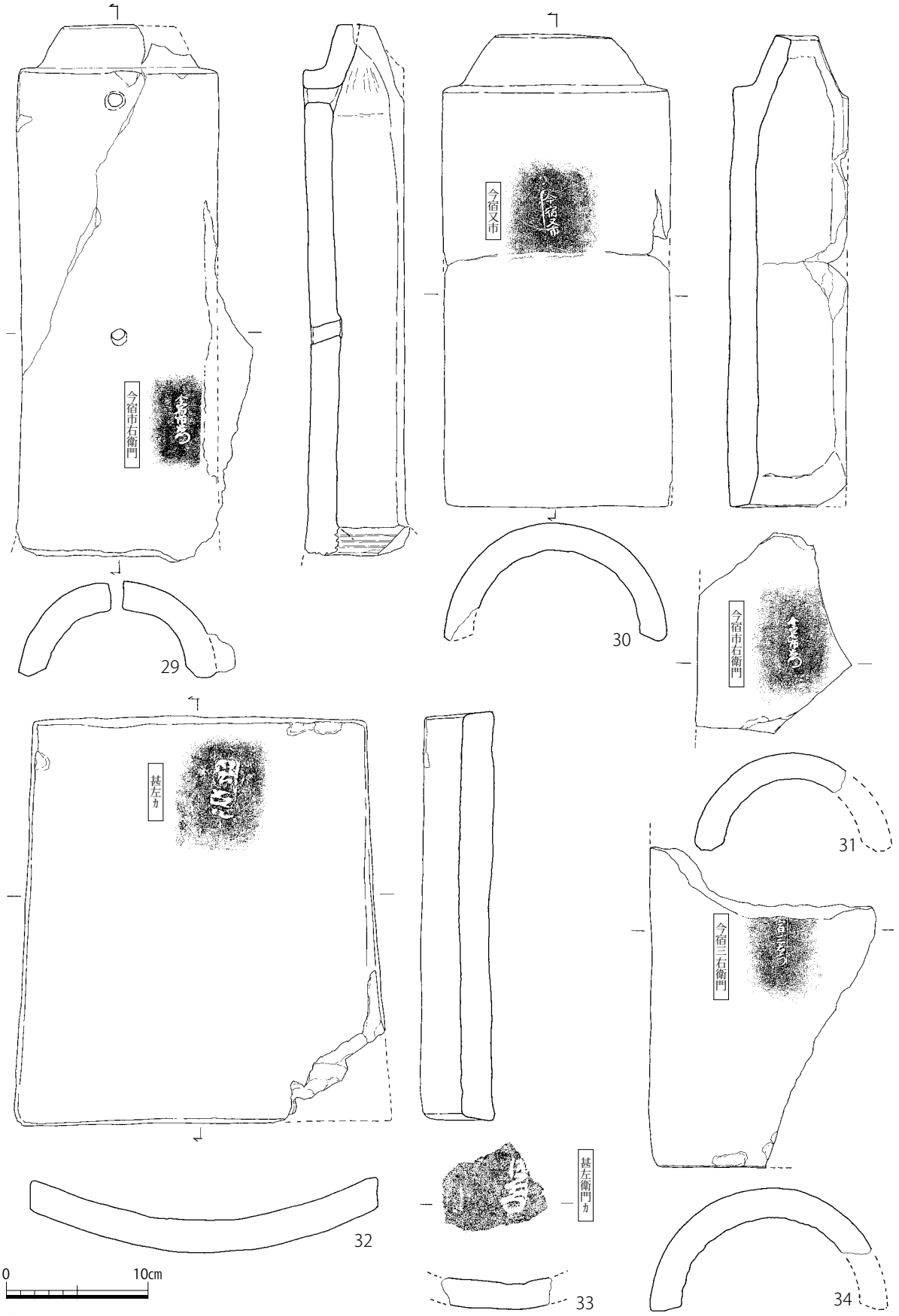


Fig.62 西三階櫓・西附平櫓　出土遺物４（¼）

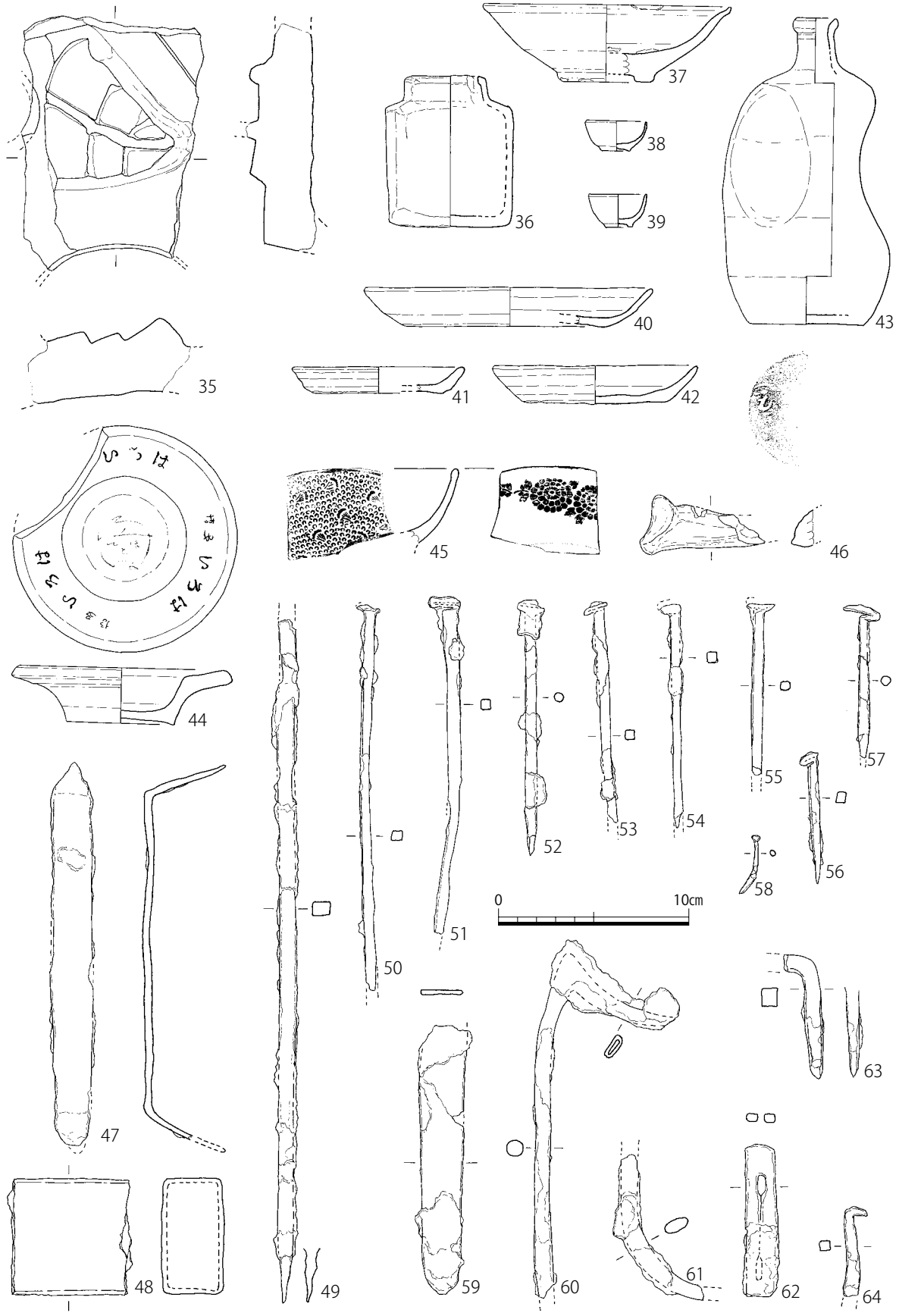


Fig.63 西三階櫓・西附平櫓　出土遺物５（⅓）

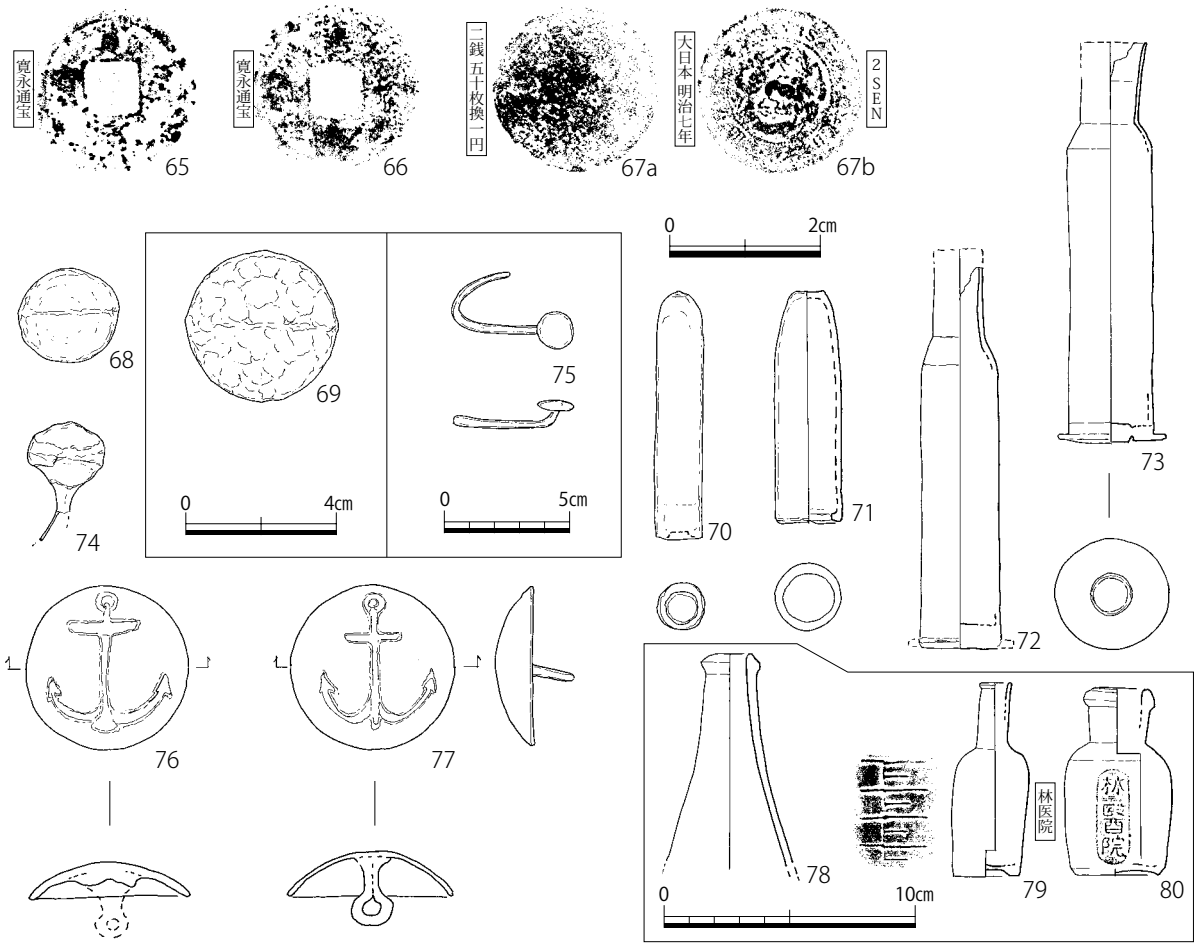


Fig.64 西三階櫓・西附平櫓　出土遺物 6（[69]= ½，[75,78-80]= ⅓，[65-68,70-74,76-77]=1/1）

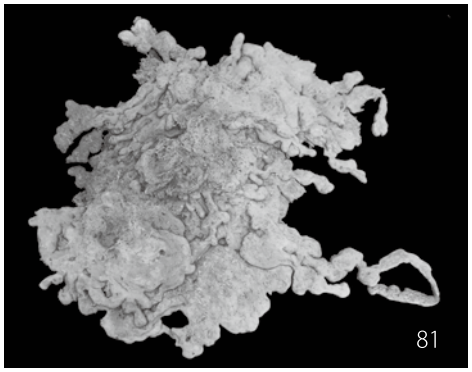


Fig.65 西三階櫓部出土　鉛塊 [81]（縮尺不同）

瓦。130 は谷草瓦(右)。114~127 はスタンプ文のある瓦で、120 は軒丸瓦、114・117・119・121~123・126 は丸瓦、115・116・118・124・125・127 は平瓦。131・199 は瓦質土器で、197 は火鉢。132~138 は陶器で、132~133・137 は甕、134~135 は皿、136 はすり鉢、138 は灯明皿。139 は型紙刷り肥前系染付輪花皿。140 は土製人形の一部。141~161 は鉄製品で、141 は角杭状品、142 は鎹、143・145・146・147 は角釘、144・148・149 は鉤状品、150 は文鎮状品、151 は鎌、152 は円柱状品、153 は八角有孔板、154 は板状品、155~157 は留金具、158・160 は飾金具、159 は飾り釘、161 はボタン状品、162 は機械部品の一部である。163~165 は古銭で、163 は寛永通宝、164 は二銭銅貨、165 は一厘銅貨である。166~167 はボタンで、166 が銅製、167 が鉛製である。168~176 は銃弾関連品で、168~171 は鉛製鉄砲玉、171 は未成品か、172 は銅製銃弾、173 は鉛製銃弾、174~178 は銅製薬莢である。179・181~182 は銅製品で、179 は帯金具の銙具、181~182 は煙管である。180 は鉛インゴット。183 は石製硯。

出土位置は 82~83・95・101・103~105・107・120~122・126~127・129・131 が二階多聞櫓、84・117・123~124・132・134~136・138・152・155・158~160・167・171・173~174

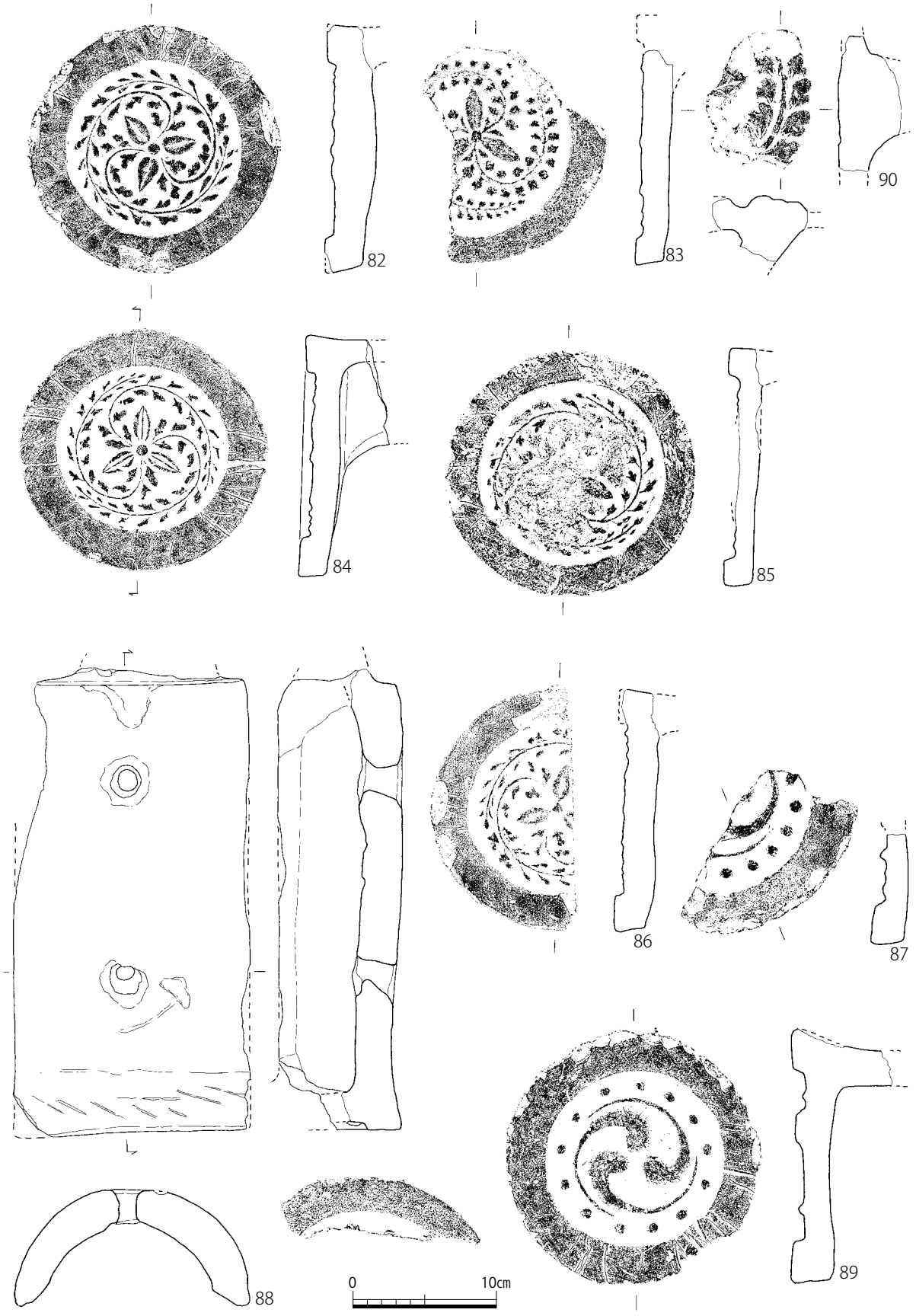


Fig.66 二階多聞櫓　出土遺物１（¼）

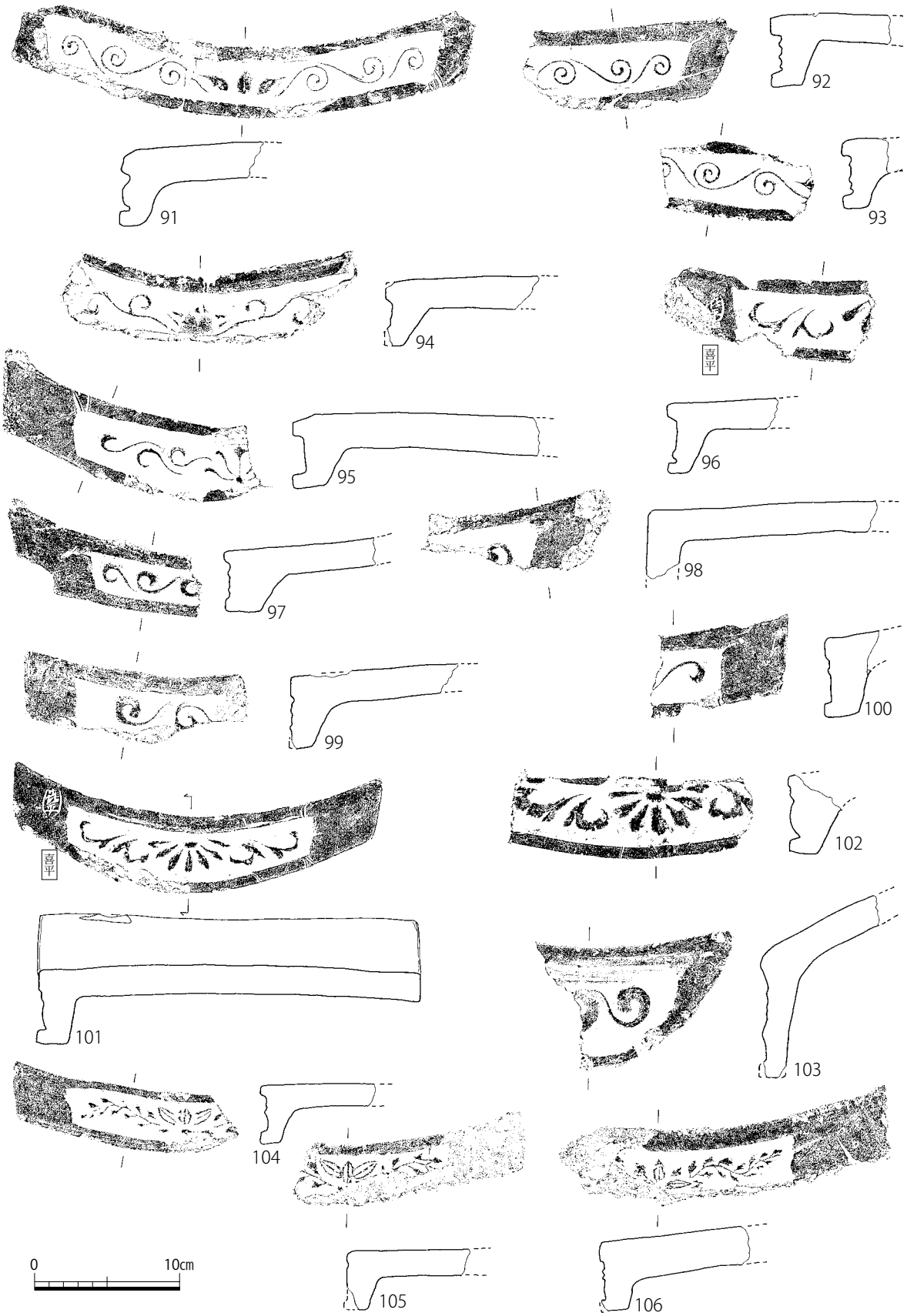


Fig.67 二階多聞櫓　出土遺物２（¼）

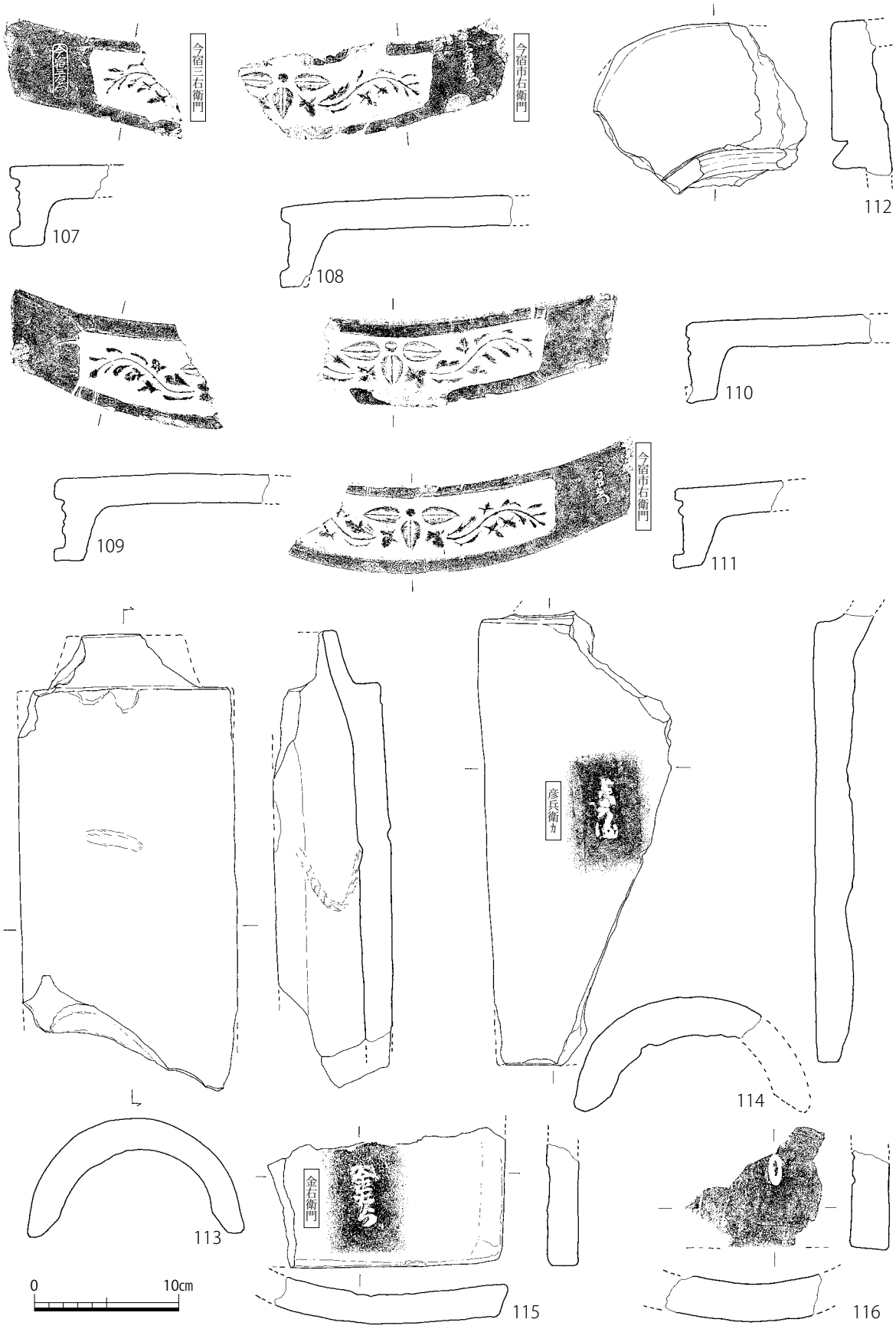


Fig.68 二階多聞櫓　出土遺物３（¼）

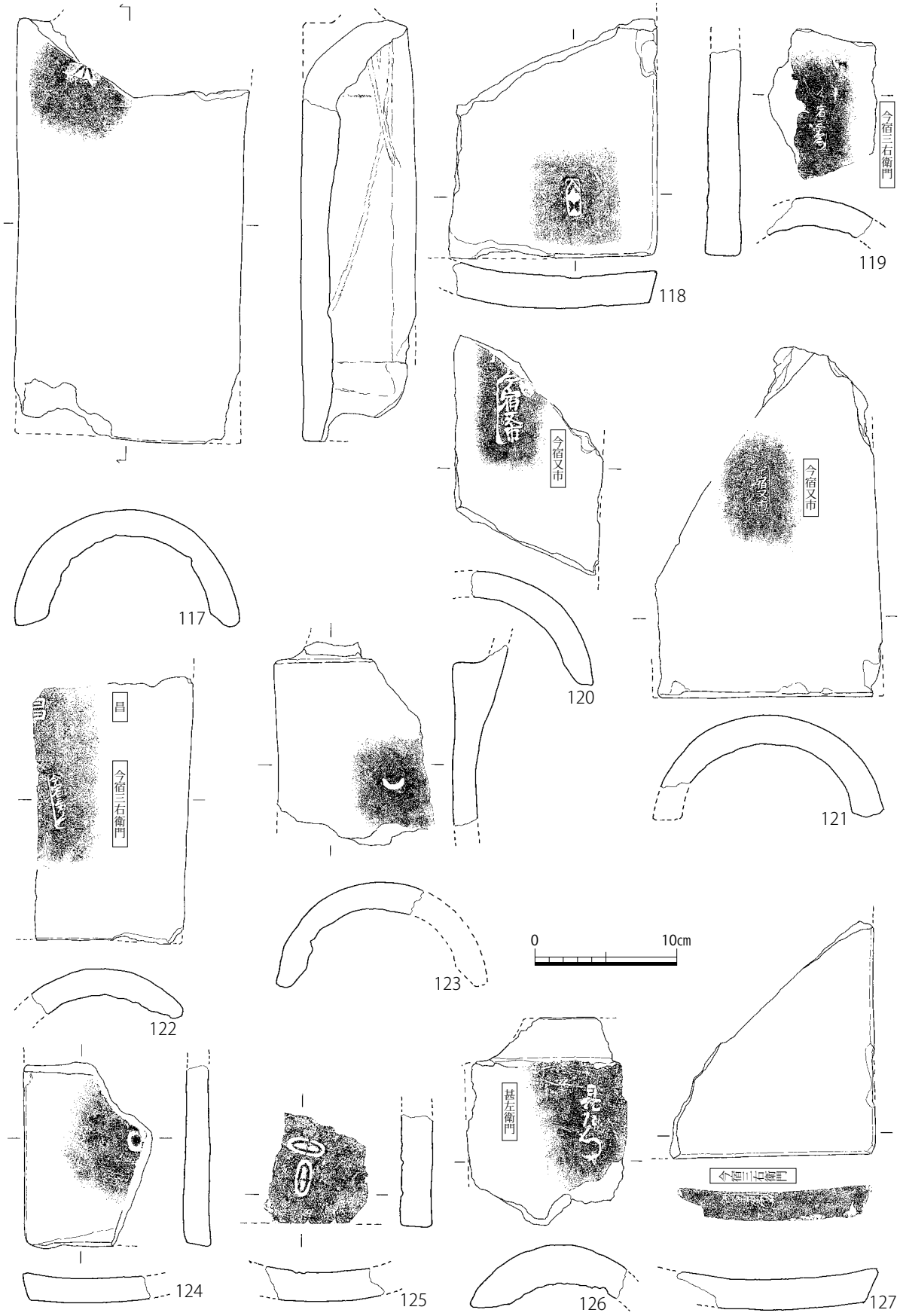


Fig.69 二階多聞櫓　出土遺物４（¼）

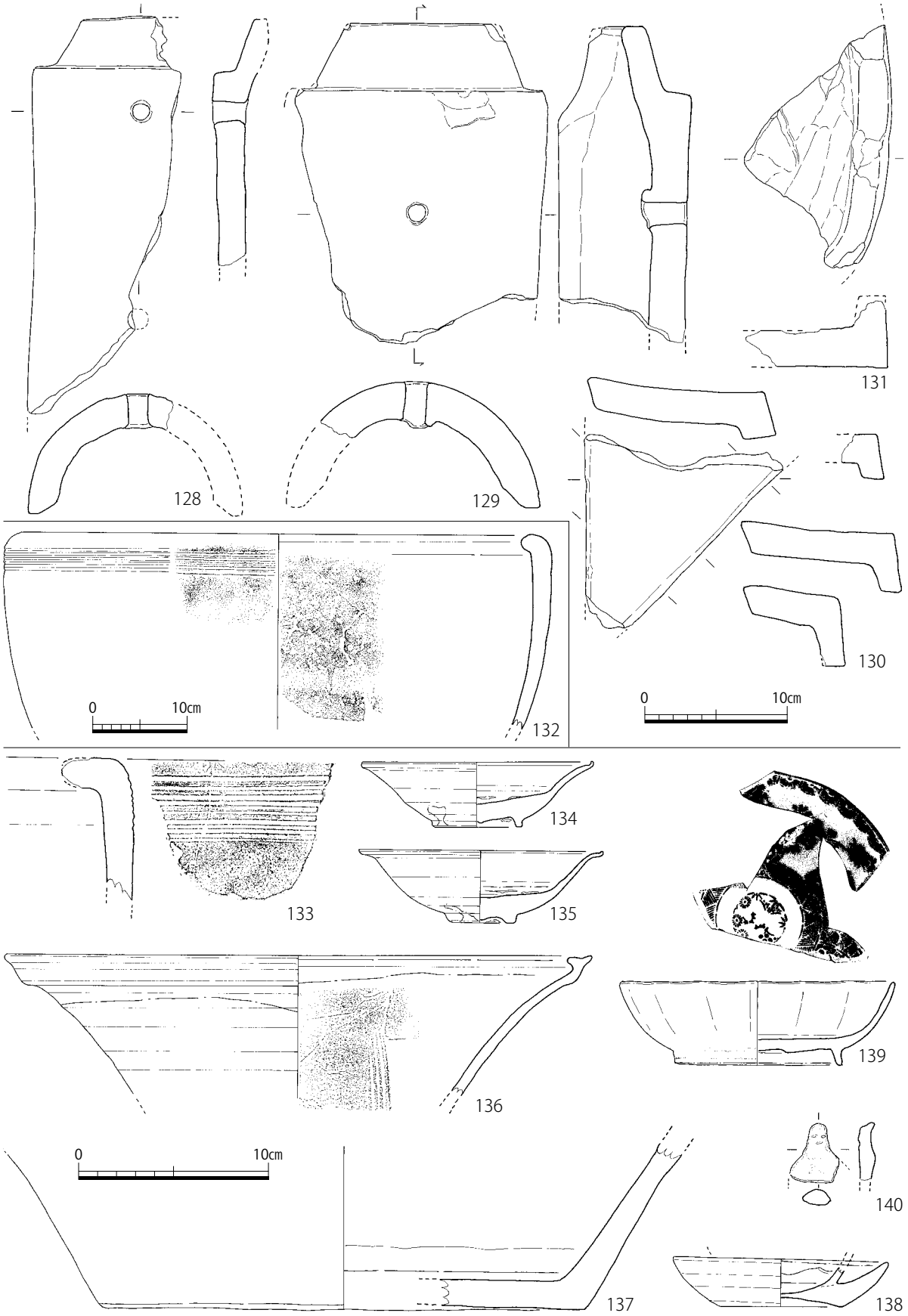


Fig.70 二階多聞櫓　出土遺物 5（[28-130]= ¼，[132]= ⅙，[133-140]= ⅓）

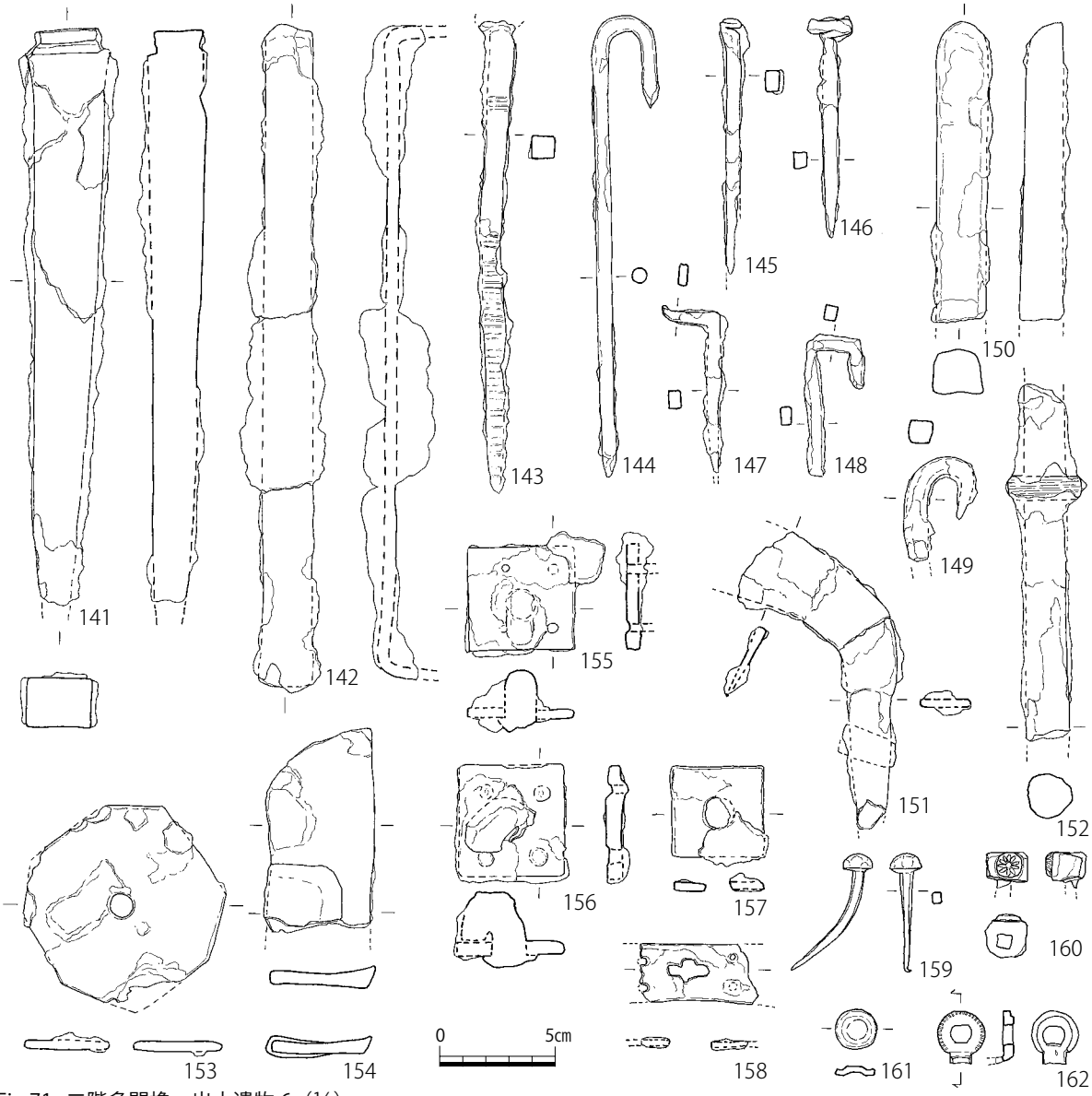


Fig.71 二階多聞櫓　出土遺物 6（⅓）

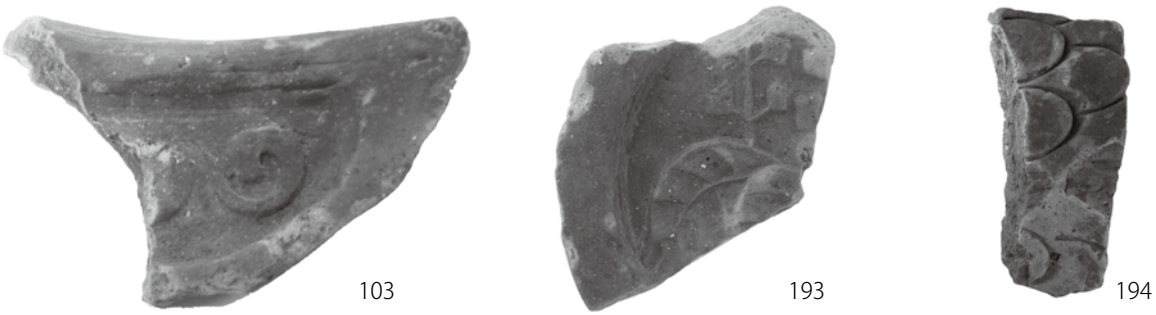


Fig.72 二階多聞櫓・東附平櫓・東三階櫓　出土瓦写真（縮尺不同）

が二階多聞櫓表土、85~87・89・93~94・96~98・100・102・106・109~110・112・114~116・118・125・128・130・133・137・140~141・144~151・153~154・157・161~166・175~176・179~181 が二階多聞櫓東部表土、88・90~91・99・108・111・113・119・139・142~143・156・168~169・172 が雨落溝 SD-01、92 が雨落溝裏込め、170 が雨落溝外である（以上 1 次調査）。また、177・178 が 10 区、197 が 11 区出土である（以上 2 次調査）。

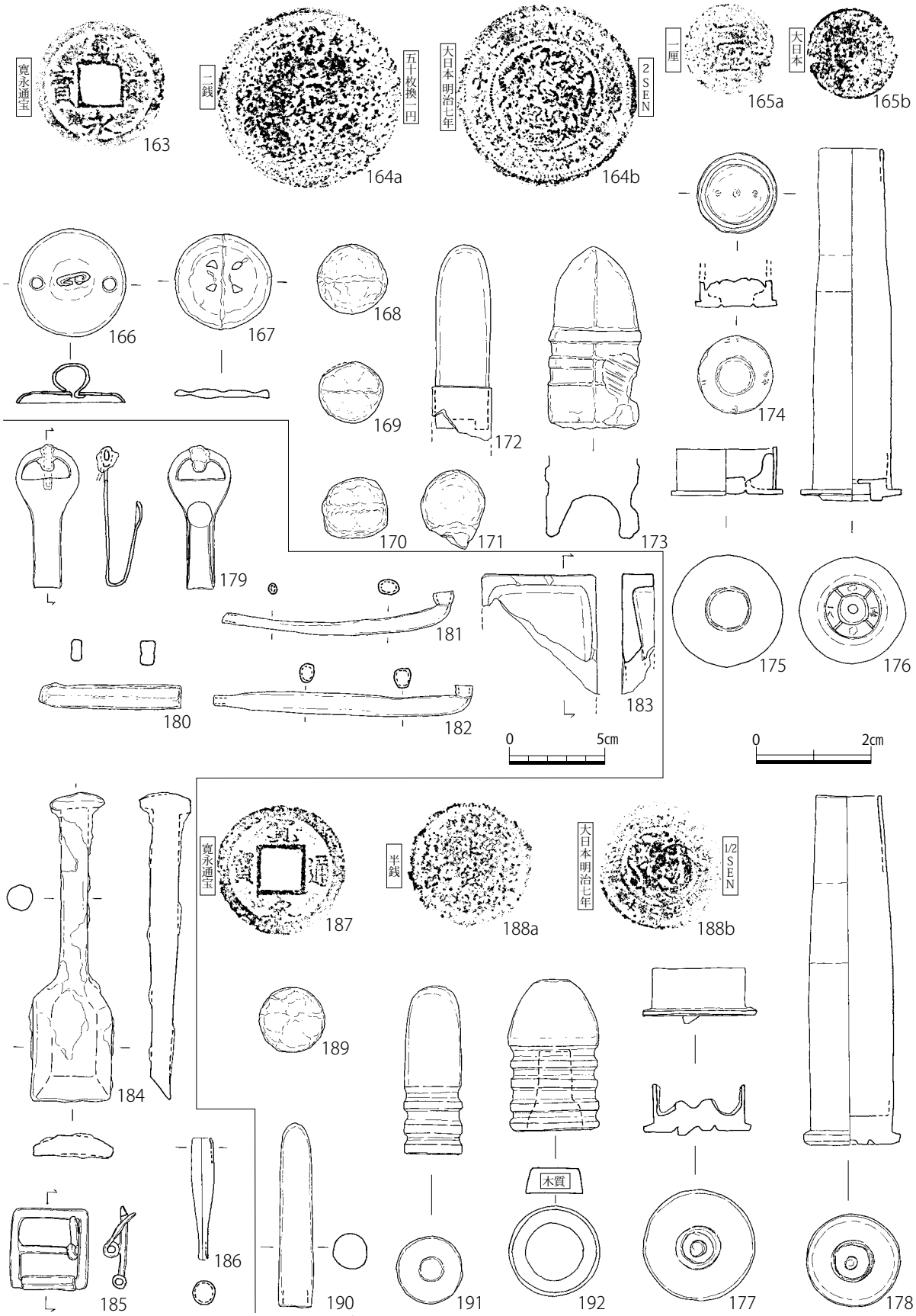


Fig.73 二階多聞櫓　出土遺物 7（[163-178]=1/1，[179-183]= 1/3 ）　東三階櫓・東附平櫓　出土遺物 1（[184-186]= 1/3，[187-192]=1/1）

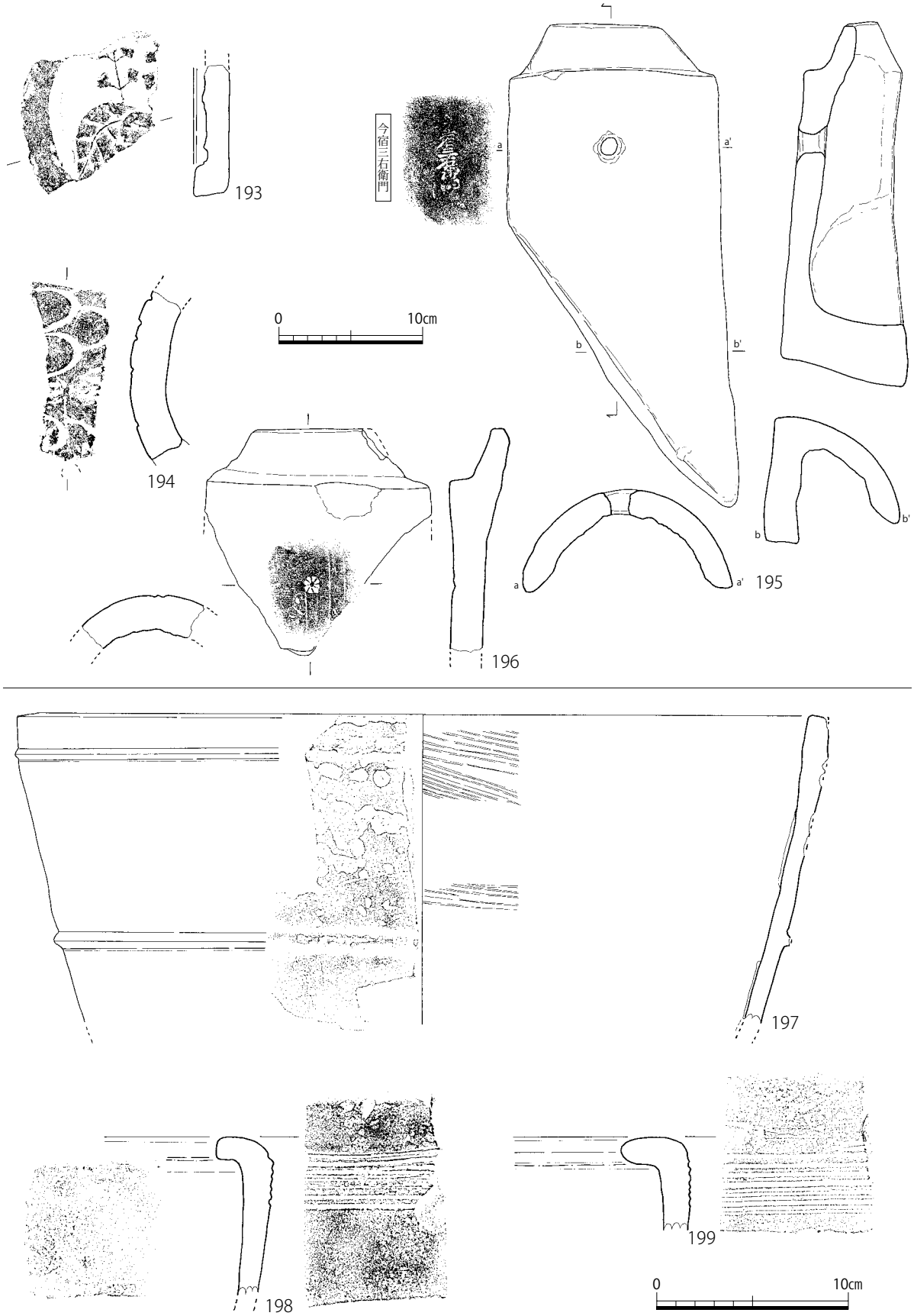


Fig.74 二階多聞櫓　出土遺物８（[197]= ⅓）　東三階櫓・東附平櫓　出土遺物２（[193-195]= ¼，[198-199]= ⅓）

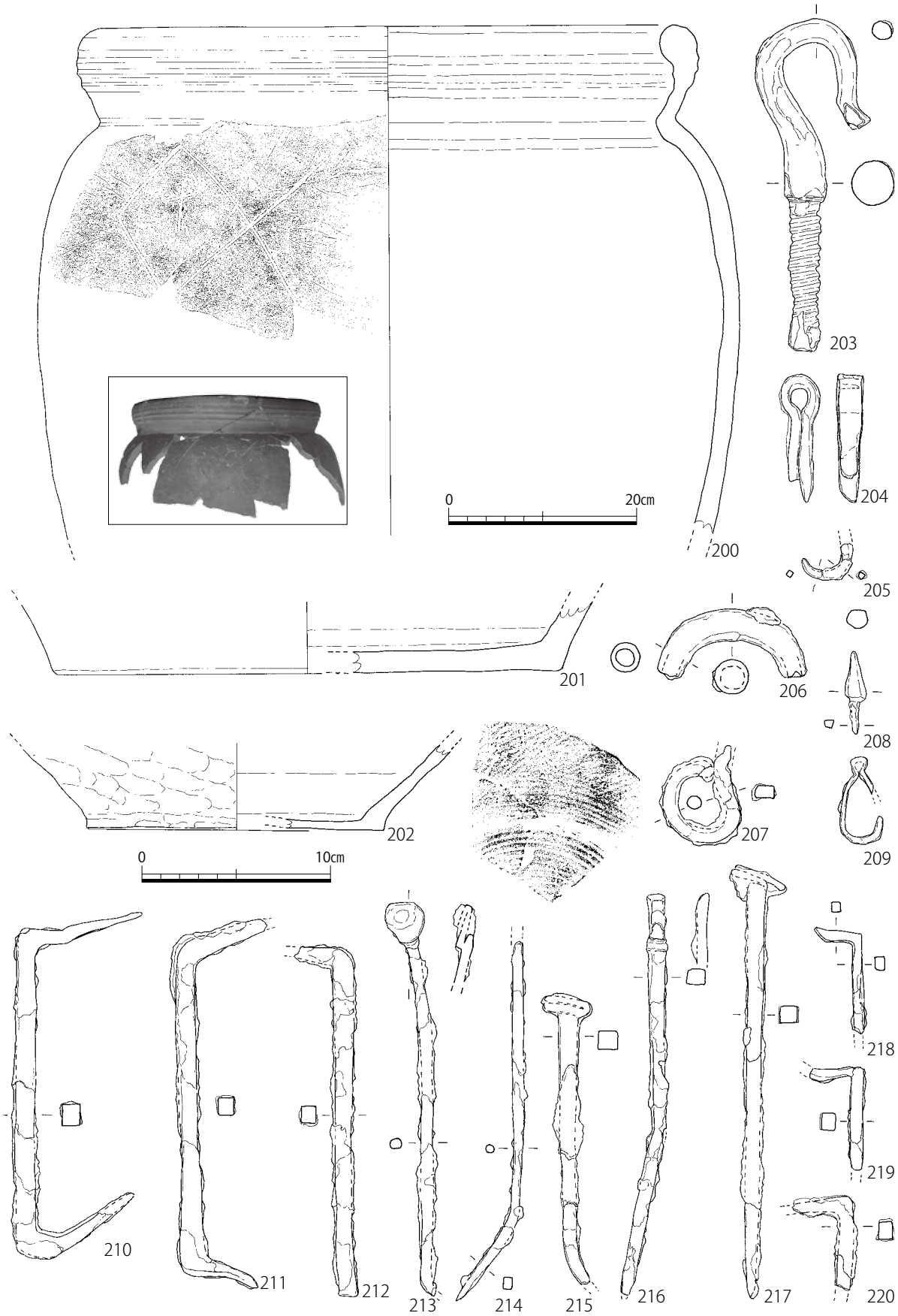


Fig.75　東三階櫓・東附平櫓　出土遺物 3（[201-220]= ⅓，[200]= ⅙）

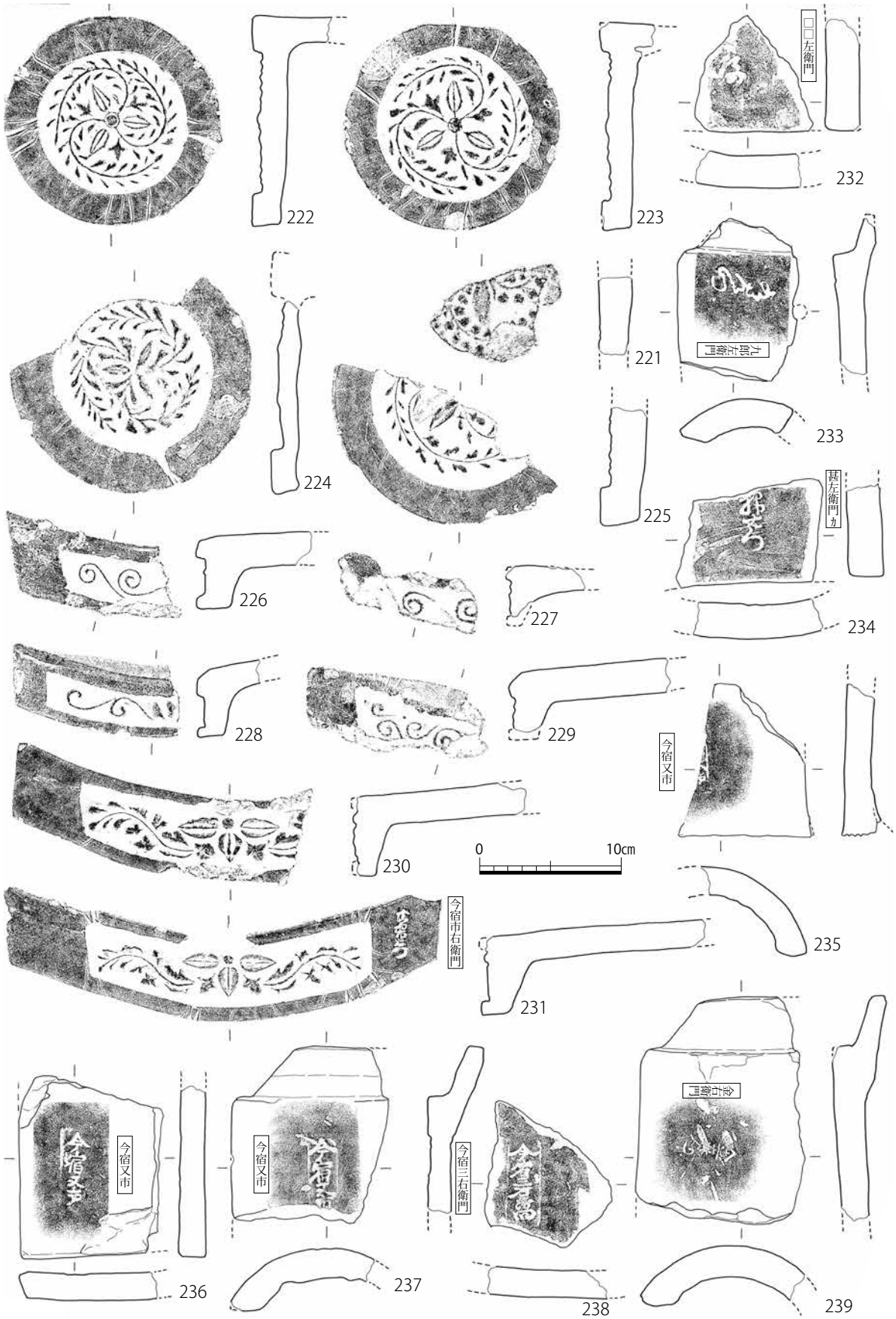


Fig.76 遺構外出土遺物１（¼）

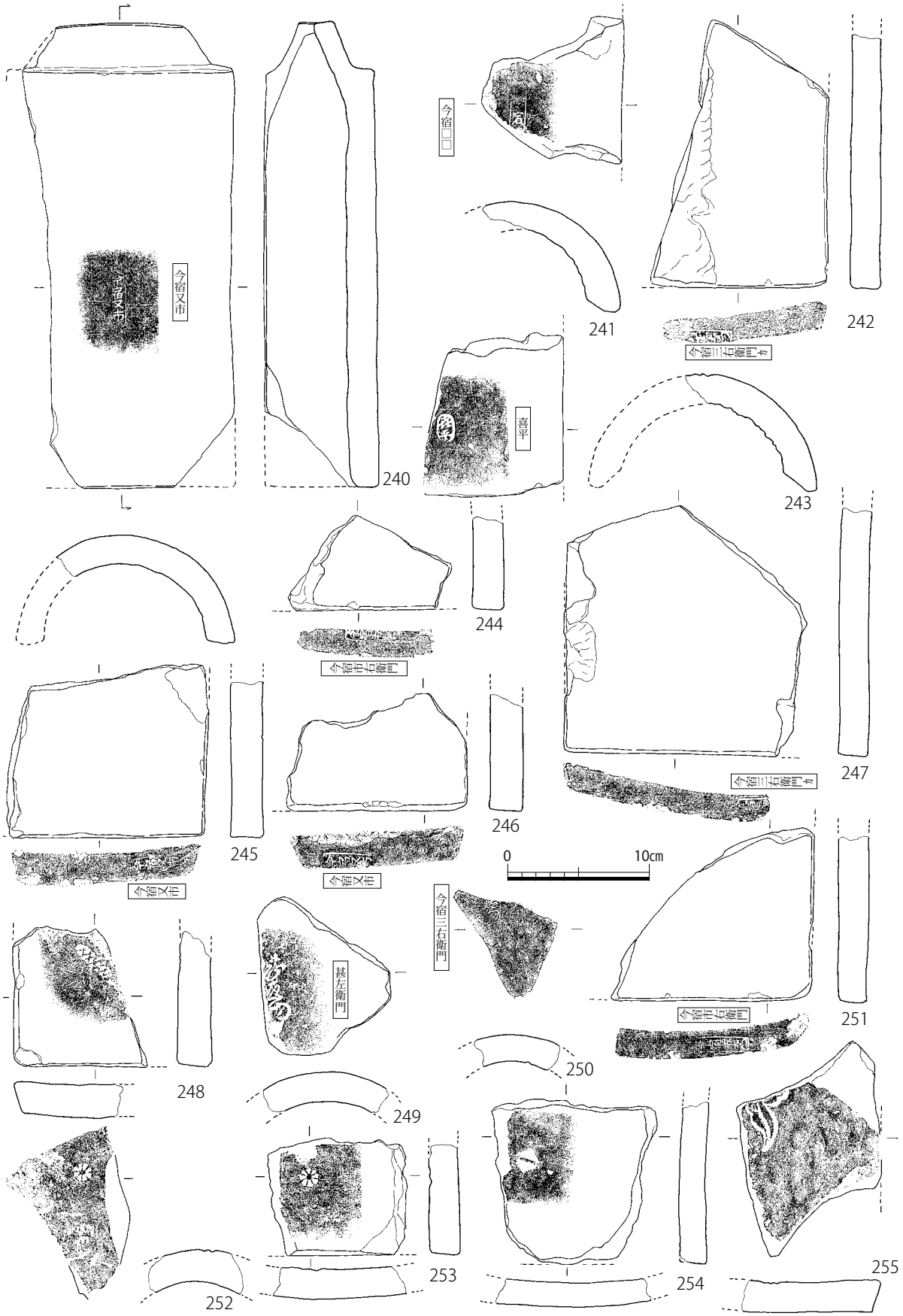


Fig.77 遺構外出土遺物２（¼）

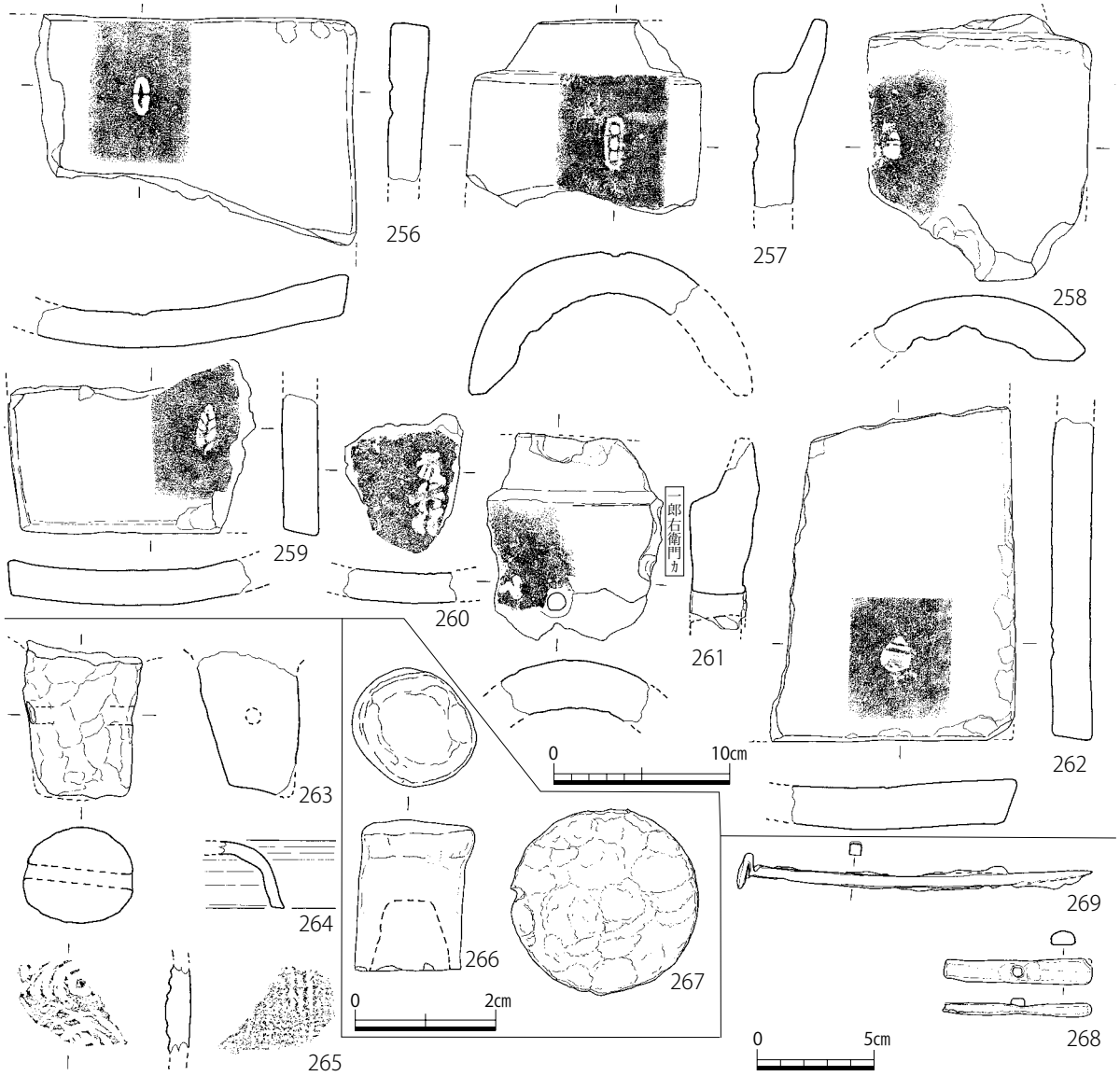


Fig.78 遺構外出土遺物３（[256-262]= ¼，[263-265,268-269]= ⅓，[266-267]=1/1）

第４項　東三階櫓・東附平櫓部

184 は鉄製鑿状工具。185・186 は銅製品で、185 はベルトの銙具、186 は煙管雁首である。187~188 は古銭で、187 は寛永通宝、188 は半銭銅貨である。189~192 は銃弾関連品で、189 は鉛製鉄砲玉、190 は銅製銃弾、191~192 は鉛製銃弾で 192 は内部空洞の形状に合うよう加工した木質をはめ込む。193~194 は瓦で、193 は桐紋の軒丸瓦Ⅷ類で五七桐の可能性がある。瓦当面復元径 19㎝前後。194 は鯱瓦片、195 は谷丸瓦（左）、196 は丸瓦、195~196 はスタンプ文あり。198~201 は陶器甕で、200 は埋甕 SX-01 として用いられた備前焼大甕。肩部にヘラ記号あり。長い玉縁に３条の凹線が入る備前焼分類の甕Ⅵ A-1 で、17 世紀前半の可能性がある[3]。202 は土師質土器の鉢か。203~220 は鉄製品で、203 は鉤状釣具、204 は絞金具、205 は鉤状品、206 は円筒状製品、207 は鋏握り部、208 は鏃形製品、209 はベルトの鉤状品、210~212 は鎹、213~214 は丸釘、215~217 は角釘、218~219 は小型鎹である。

出土位置は 195・196 が Tr.②である（以上１次調査）。また、184 が１区雨落溝 SD-05、188・

3　備前市教育委員会 2013『備前窯詳細分布調査報告書』

205 が 1 区埋甕内下層、200 が 1 区、214 が 1-6 区間ベルト、203・204・208・213・216 が 2 区表土、209 が 2-3a 区間ベルト、211 が 2-3b 区間ベルト、193 が 3a 区表土、217 が 3a-4 区間ベルト、194・215 が 3b 区表土、207 が 3c 区上層、220 が 3c 区、198・210・218~219 が 4 区表土、187・199・201 が 5a 区、186・202 が 8 区、206 が 9 区、191~192 が 12 区、185・190 が 13 区、189 が表土である（以上 2 次調査）。なお、200 の埋甕 SX-01 は第 2 章第 1 節第 5 項で詳述している。

第 5 項　遺構外出土遺物

遺構外出土遺物で主なものを図示した。221~225 は軒丸瓦で、221 は軒丸瓦Ⅱ A 類、222~225 はⅡ C 類である。226~231 は軒平瓦で、228 が軒平瓦Ⅳ -3 類か、226~227・229 は唐草文部の破片、230~231 は軒平瓦Ⅷ類である。232~262 はスタンプ文のある瓦で、235 は軒丸瓦、233・237・239・240・241・243・249~250・252・257~258・261 は丸瓦、232・234・236・238・242・244~248・251・253~255・256・259~260・262 は平瓦。263 は瓦質土器火鉢脚部。264~265 は須恵器で、264 は杯蓋片、265 は甕破片である。266~268 は鉛製品で、266 が円筒状品、267 が大砲砲弾で 30 匁火縄抱え大筒用か、268 は文鎮状品、269 は鉄製角釘である。

第 6 項　出土遺物考察

福岡城内の他発掘調査地点と比較して特徴的なのは、銃弾関連品が多いことである。各櫓、遺構外から広く出土し、江戸時代の火縄銃弾・大筒砲弾（69・267）から、近代のミニエー銃弾（173・192）、薬莢類（72-73・174-178）まで多彩である。第 1 章第 3 節第 4 項で述べた武具櫓の機能や、明治 35 年の武具櫓床下で多量の硝薬・弾丸を発見という報道[4] を裏付ける遺物である。

生活用具に関しては、江戸期に遡る可能性がある遺物は一部の陶磁器のみであるのに対し、近代のものはボタン（76-77 ほか）、灰皿（44）、銅貨（67 ほか）、薬瓶（80 ほか）衣食住にかかわる様々なものが出土し、軍隊時代は仮兵舎として用いられた（Fig.3）ことの証左といえよう。

瓦については、雨落溝 SD-03 出土瓦が状況から大正 5 年の移築時に廃棄されたものとみられ、1~5・7・9~21・23~25・29・31・33~35 の瓦のセットが幕末期武具櫓の屋根瓦の指標となる。このセットは軒丸瓦Ⅱ C 類が中心でスタンプはⅢ類でありⅣ-3 期（＝ 18 世紀後半～幕末）の瓦の特徴を示し、出土状況とも整合する。ただし、 1 のようにⅣ-1 期（＝ 17 世紀代）の瓦も幕末期まで用いられたことは注意しておく必要がある。谷丸瓦（195）や鯱瓦（194）も屋根瓦復元の際に参考となる資料である。

滴水瓦（103）は文禄・慶長の役に従軍した戦国大名の城に用いられることが多い瓦で、桐紋軒丸瓦（193）は豊臣系大名の城郭に葺かれる瓦である。どちらも本丸月見櫓跡・祈念櫓跡から類例が出土している[5]。また、名島城期に遡る可能性のある軒平瓦 91~94（＝Ⅲ-2 期）も出土してる。これらの瓦は、名島城の建物や石垣を福岡築城の際に移築して用いたという「名島引け」によって、武具櫓が建てられた可能性があることを考古学的に示すものである。

その他各櫓からは、多量の釘・鎹等の建築材料が出土しており、武具櫓復元の際に参考となる資料である。また、古墳時代須恵器（264-265）も出土しており、昭和期に天守台内部で古墳の石棺が見つかった事実[6]と合わせ、福岡城築城以前の旧地形および古墳の分布を考える一資料といえる。

4　第 1 章第 3 節第 5 項 Fig.3 火薬発見の場所（〇）として武具櫓二階多聞櫓中央部付近を示している。

5　福岡市教育委員会 1992『福岡城月見櫓』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 316 集
　福岡市教育委員会 2014『福岡城祈念櫓跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1247 集

6　福岡市教育委員会 2012「Ⅱ-5 福岡城跡の調査」『福岡城跡保存管理計画』

第３章　成果と課題

第１節　発掘調査成果

発掘調査成果から、移築前の武具櫓の規模および礎石と柱通りをFig.79・80のように復元した。柱通りは東西方向で「一～十」の10通り、南北方向は「い～ふ」の32通りとし、(Fig.78下)。各柱通り間の距離（㎝）をFig.80に示した。

建物規模は、建築専門家の検討を必要とするが、二階多聞櫓が北側桁行160尺（≒4900㎝）・梁行30尺（≒900㎝）、東三階櫓・東附平櫓部全体では桁行53尺（≒1600cm）・梁行26尺（≒790cm）、西三階櫓・西附平櫓部全体では桁行23尺（≒1200㎝）・梁行26尺（≒790cm）が復元される。東西「四」・南北「ろ」「は」通り等の礎石間隔から、一間は6尺5寸（≒196㎝）が基本とみられる。軒出は桁柱と雨落溝との距離から2尺5寸～3尺（≒75～90㎝）が想定されよう。

建物の建替えは、創建されてから廃城されるまでに少なくとも3回以上は行われた可能性が高いことが、西附平櫓・西三階櫓部の礎石・礎石据付穴の状況および出土遺物から推定される。また、旧雨落溝とみられるSD-09が二階多聞櫓内部より検出されたことから、時期は不明だが、二階多聞櫓を梁行1間分北側拡張する建替が行われたことが明らかになった。

戸前についても、沓脱石100・101・102の3石が原位置をおよそ保った状態で検出され、二階多聞櫓部3か所の位置が判明した。

また、武具櫓曲輪石垣天端の比高差は、西出隅角を基準とすると、南面中央部で±0㎝、西入隅角で+20㎝、東出隅角で−50㎝、東入隅角で+20㎝を測る（Fig.5・78下)。最も比高差が大きかった

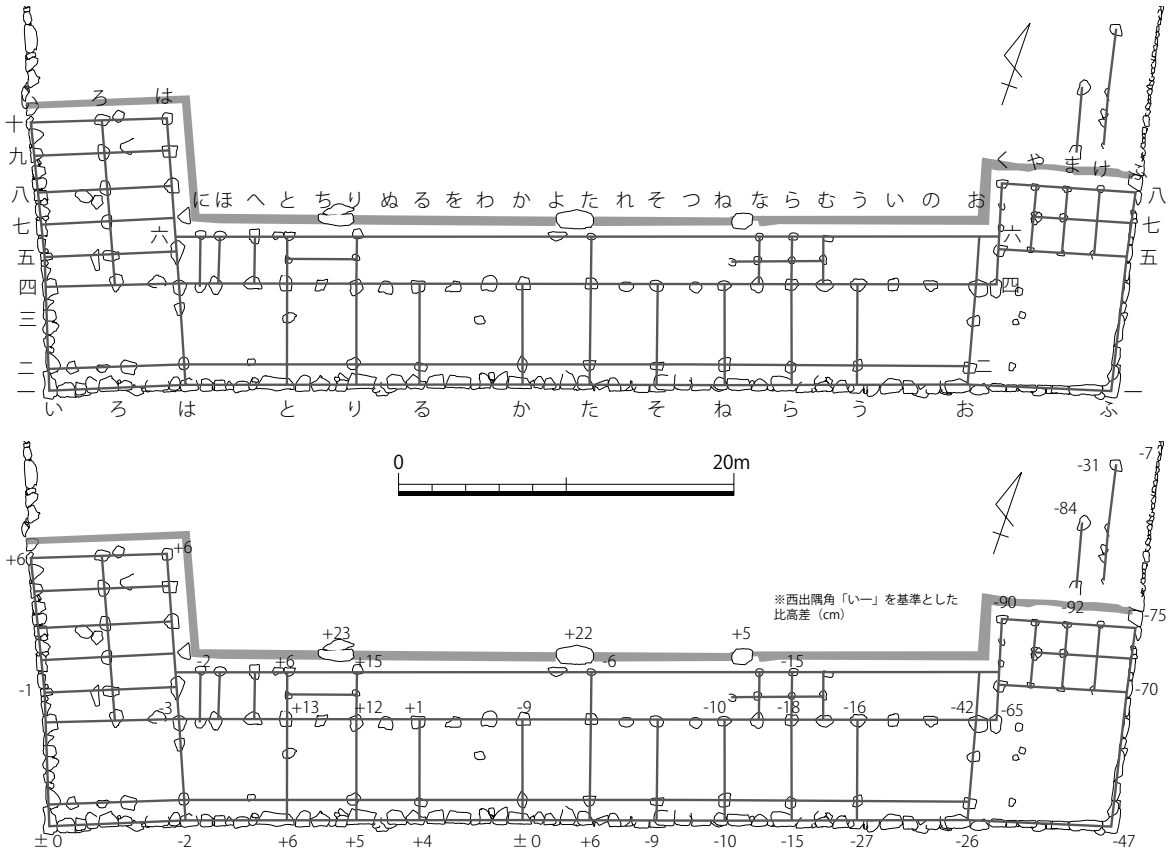


Fig.79 武具櫓推定柱通り・武具櫓各所の比高差（単位㎝・1/450）

のは、東出隅角から北 13 m地点での -75㎝である。これは、曲輪全体が南方向に緩やかに傾斜するものの、南東隅部の傾斜が際立って大きい状況を示す。同様に、遺構面でも東三階櫓及び東附平櫓の西側柱筋付近（南北「お」通り）を境に急激に下がる（Fig.53・79 下）。南東隅部の石垣を中心に元位置から下方に移動した結果、地盤も沈下したものと判断されるが、武具櫓曲輪石垣の石積みにおいて大きな変化は認められない（Fig. 7 ）。地盤の下がった東三階櫓内遺構面からも小型であるが礎石が検出されており、石垣の沈下に合わせて土台柱と床下を調整することで櫓を支えていたとみられる。

第 2 節　文献資料との照合

今回の整理報告に伴う関連資料調査の中で、先行研究では知られていなかった新出の武具櫓関連資

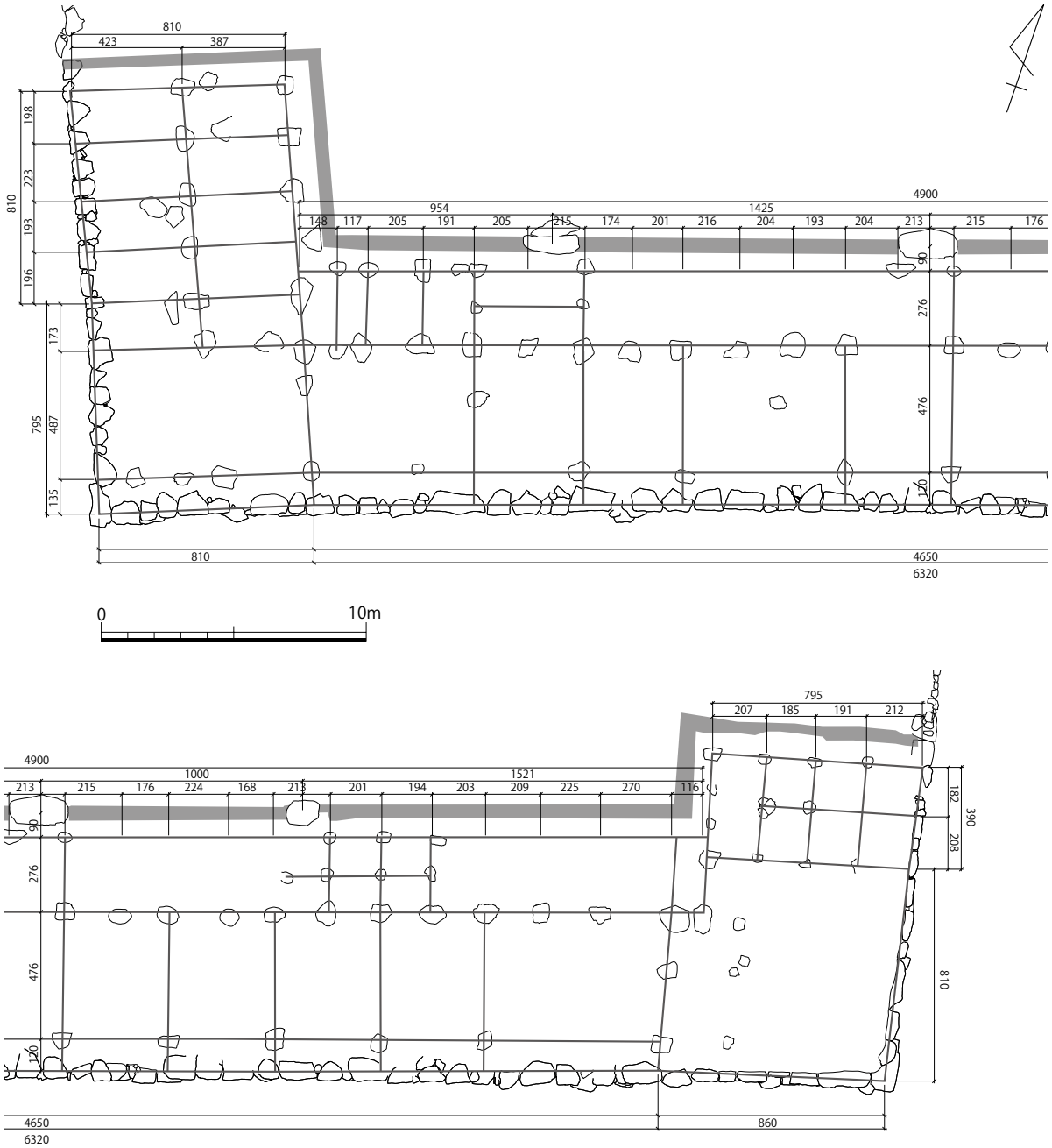


Fig.80 武具櫓推定柱通り計測値（単位㎝・1/250 ）

料を発見したので本節で報告と検討を行う。『大正十一年三月福岡縣下行啓ニ関スル心得』[1]に所収の「黒田家別邸全図」（巻頭２）である。これは大正 11 年の大正皇太后の福岡県下行啓の際に宿泊所となった黒田家別邸内の一行滞在時部屋割図である。これまで写真のみで図面のなかった黒田家別邸の全容を伝える貴重な資料である。屋敷北西の武具櫓部に注目すると、1 階は西三階櫓・西附平櫓部、二階多聞櫓部、東三階櫓・東附平櫓部の３つに分かれている。東三階櫓・東附平櫓部は板間をはさみ土間と広間になり、広間部は正方形でなく北東に入隅部が設けられている。この部分は東三階櫓西側柱通りが直線でなく屈曲する南北「お」「く」通りにあたる。二階多聞櫓部の廊下と部屋の幅の比が 1：3 であることも、南北「六」「四」と「四」「一」通りの幅の比が 1 間：3 間であることと整合する。

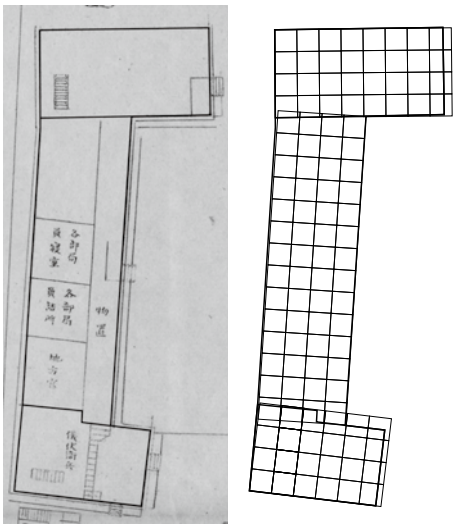


Fig.81 黒田別邸図武具櫓（拡大･一部トレース）および内部間数検証図

また、第 1 章第 3 節第 2 項でふれた記事[2]では、黒田家別邸移築後の二階多聞櫓は 15 × 3 間で、福岡城時代から 8 間縮めたとするが、Fig.81 右の検証図では移築後二階多聞櫓は 14 × 4 間となる。発掘成果も二階多聞櫓部梁行＝ 4 間で､資料と整合する。さらに一間＝ 6 尺 5 寸という発掘成果から、移築前二階多聞櫓北側桁行 160 尺は 24 間となり、移築時には桁行のみを 10 間縮めたというのが正確な数字であろう。また、一間＝ 6 尺 5 寸を長政書状「三十間ニ居矢倉立候」に当てはめると 30 間 ≒ 59m となり、南面石垣天端距離 63.2 mに近い長さとなる。

1　宮内庁書陵部所蔵『幸啓録二　大正 11 年』（識別番号 7245-1）　縦 28cm ×横 23cm、紙に謄写印刷か。
2　『福岡日日新聞』大正 5 年 6 月 5 日 、第 1 章第 3 節第 2 項でも引用。

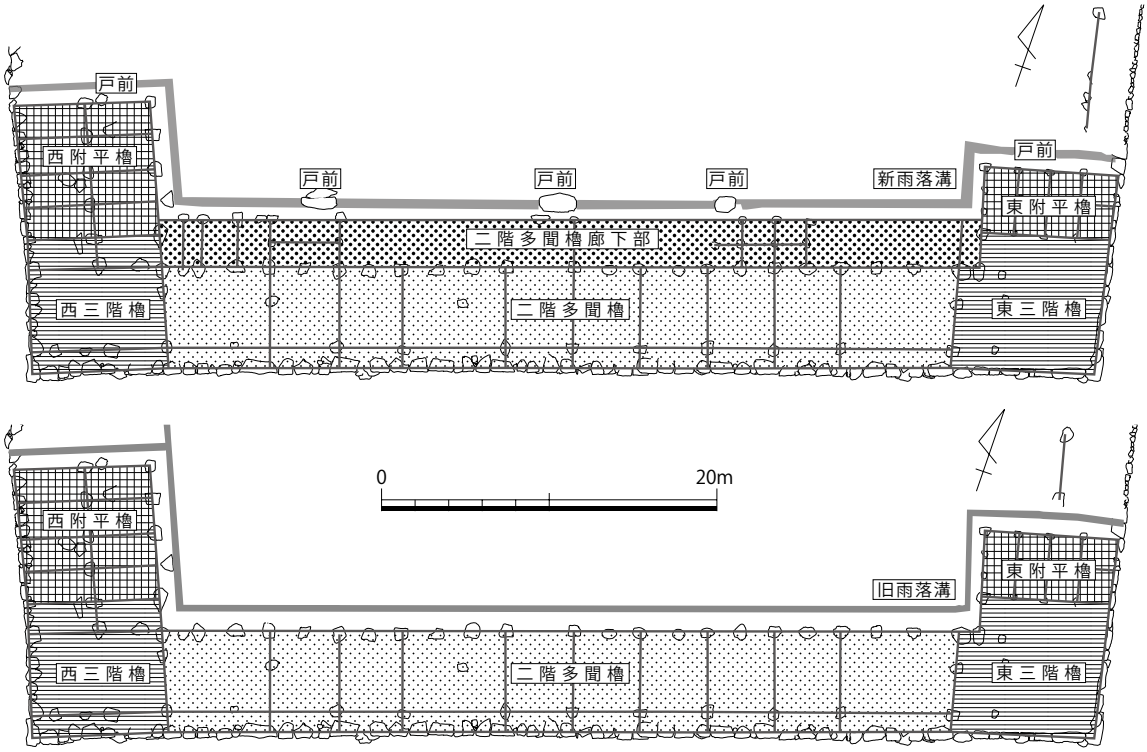


Fig.82 移築前武具櫓（幕末期～大正 5 年・上）および旧武具櫓（時期不明・下）一階平面　想定復元図（1/450）

移築時に改変された可能性もあるが、東附平櫓と西附平櫓の入口も示され、特に東附平櫓の戸前位置は雨落溝幅から推定される戸前位置と整合する。これにより 3 か所の沓脱石の位置と合わせると、「御要害御門法三ヶ所御門定ほか」にみえる武具櫓の戸前 5 か所の位置はほぼ特定できる。

その他、西三階櫓・西附平櫓部の 1 階が一続きの広間であること、階段の位置と昇降方向が図示されていることも建築分野からの武具櫓上屋復元に資するであろう。

以上、発掘成果と文献資料との照合結果から想定復元した、移築前武具櫓一階平面図を Fig.82 上に示す。Fig.82 下は旧雨落溝の発掘成果から想定復元した旧武具櫓一階平面図である。二階多聞櫓部以外は不確定なため、移築前武具櫓を踏襲した。旧武具櫓の二階多聞櫓は梁行 3 間となり、移築前武具櫓と比較すると構造上不安定に見えるが、金沢城三十間長屋も梁行 3 間・桁行 36.5 間余の二階多聞櫓であり、3 間× 24 間の二階多聞櫓も建築的に可能と考える。

第 3 節　課題

今回の調査により移築前武具櫓一階平面および二階多聞櫓部の建替については具体的な知見を得ることができたが、以前からの論点である武具櫓の東西両面石垣上の櫓の有無については、確証を得ることができなかった。また、大天守台・中天守台南際の犬走り状の高まりの形成時期確認も含めて、武具櫓曲輪全体の歴史的変遷を把握することも史跡整備のために必要な要素である。また、武具櫓曲輪南東隅部の沈下も、発掘からはその原因や発生時期を特定できなかった。今後は石垣自体の調査により原因を究明していくことが建造物復元を進める上で必須となろう。当該石垣調査はまた、長政書状にみえる福岡城普請の具体像の解明や、福岡城築城前の鴻臚館時代の旧地形を知る上でも重要である。

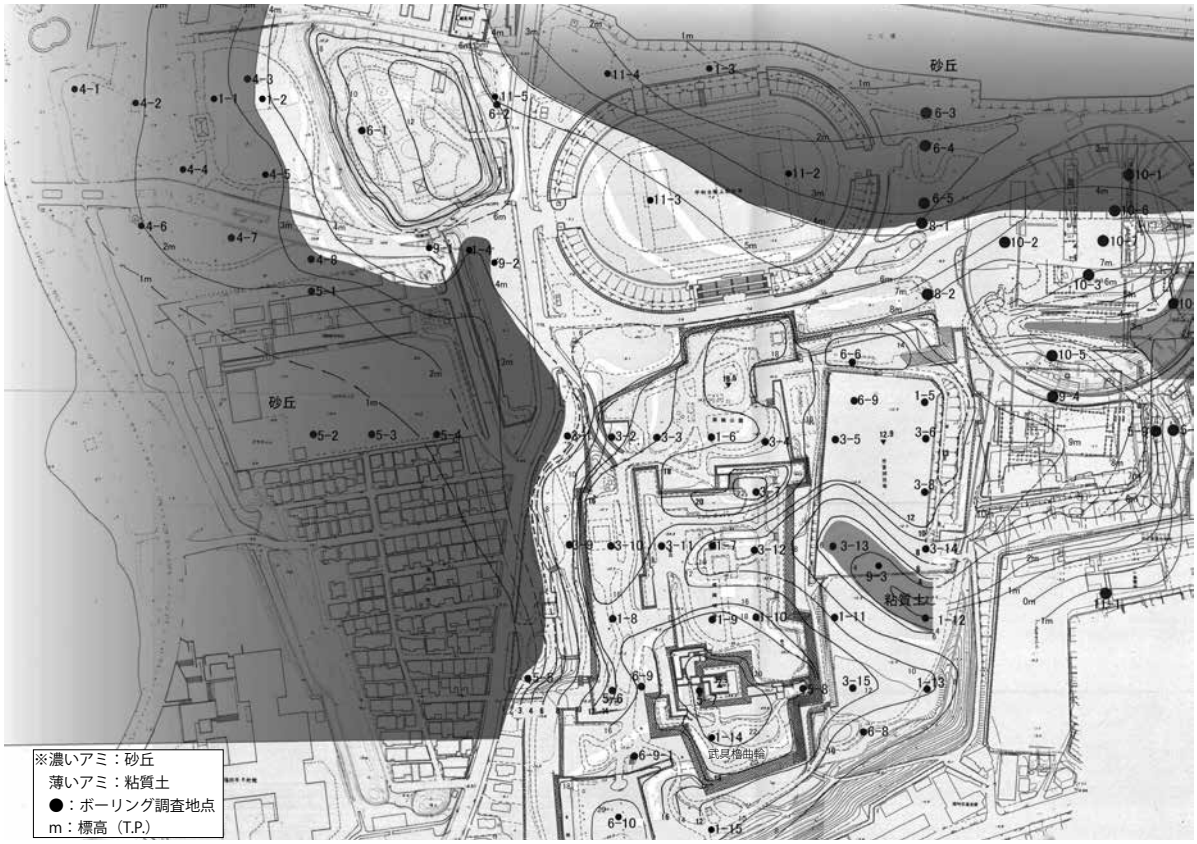


Fig.83　福岡城旧地形推定図（『国史跡福岡城跡　保存管理計画』図Ⅱ -11）

報 告 書 抄 録

ふりがな	くにしせきふくおかじょうあと
書名	国史跡　福岡城跡
副書名	本丸武具櫓跡　発掘調査報告
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 1327 集
編著者名	赤坂亨／髙山英朗
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒 810-8621　福岡市中央区天神１丁目８－１
発行年月日	2017 年 3 月 24 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
国史跡福岡城跡 本丸武具櫓跡	福岡県福岡市中央区城内	40130	0193	33° 35′ 2″	130° 23′ 0″	20131119 ～ 20140328 20141218 ～ 20150318	346.2 262	福岡城跡整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
国史跡福岡城跡 本丸武具櫓跡	城郭跡	江戸時代 ～現代	礎石 石垣 雨落溝 土塀基礎石列 埋甕	近世瓦 陶磁器 備前焼大甕 銃弾関連品 釘・鎹	本丸南端に位置する東西三階櫓と両櫓を繋ぐ、二階多聞櫓からなる武具櫓跡の遺構

要　　約	本調査では、礎石列・沓脱石・新旧雨落溝等の発掘調査成果と、文献資料との照合により、大正５年に黒田家別邸へ移築する前の武具櫓規模、一階平面プラン、および二階多聞櫓部の建替について具体的な知見を得ることができた。また、滴水瓦や桐紋軒丸瓦をはじめとする福岡城築城期の遺物も出土した。

「国史跡　福岡城跡」
本丸武具櫓跡　発掘調査報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1327集

2017（平成 29）年 3 月 24 日発行

編集・発行　福 岡 市 教 育 委 員 会
福岡市中央区天神１丁目８－１

印　　刷　株 式 会 社 ハ ザ マ 印 刷
福岡市南区那の川１丁目 20 番 23 号